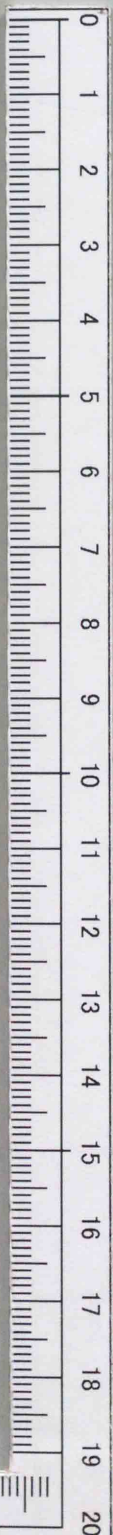


大正國語讀本

卷九

3159  
H019  
資料室



41540

教科書文庫

4
810
41-1916
200030 1475

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

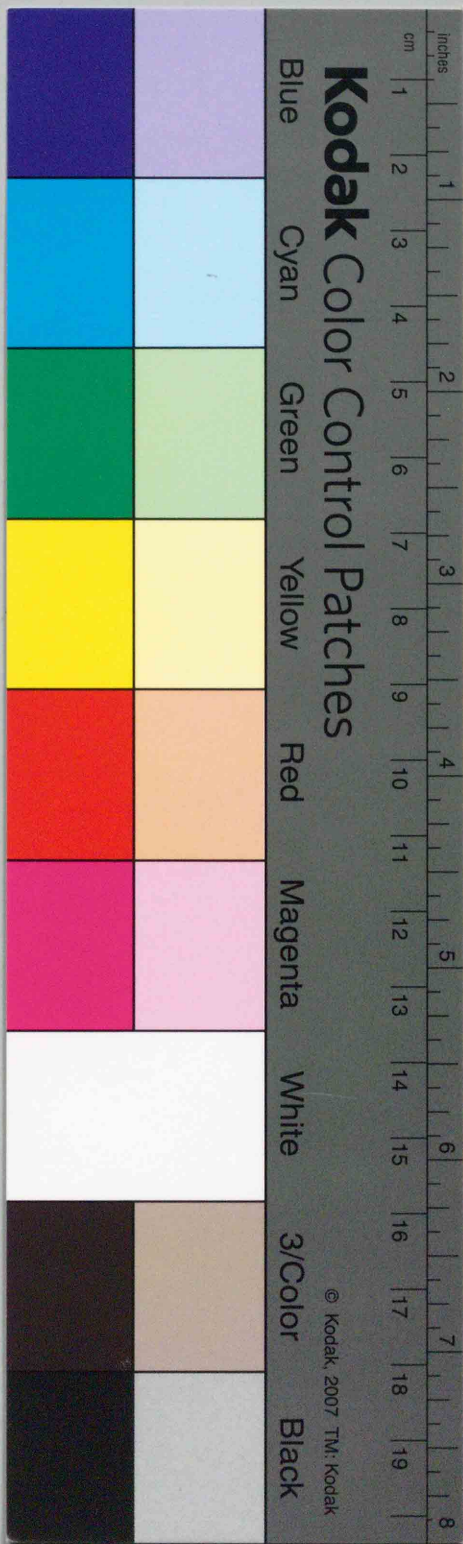


© Kodak, 2007 TM, Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM, Kodak





資料室

日六十二月二十年五正大

濟定檢省部文

用科教科語國校學中

375.9

H019

保科孝一編

大正國語讀本

東京 會社資育英書院發行



大正國語讀本 卷九

目次

- 一 國體の精華……………穂積 八 束……………一
- 二 山鹿素行と乃木大將……………横山 健堂……………八
- 三 建武中興論その一……………源 親 房……………一六
- 四 建武中興論その二…………………………二四
- 五 朗 詠(韻文)……………(和漢朗詠集)……………三一
- 六 靈 感その一……………徳富 蘇 峰……………三六
- 七 靈 感その二…………………………四一
- 八 新島守その一……………(増 鏡)……………四七

目次



九 新島守その二……………五三

一〇 眞野の陵その一……………熊田 葦城…五九

一一 眞野の陵その二……………六四

一二 世界の四聖その一……………高山林次郎…七〇

一三 世界の四聖その二……………七九

一四 月前納涼……………本居 宣長…八六

一五 頼山陽その一……………朝日奈知泉…九〇

一六 頼山陽その二……………九九

一七 平野國臣の歌……………(日 南 集)…一〇三

一八 ファウストの絶望……………谷崎 精一…一〇〇

一九 ワイマールより(候文)……………藤代 禎輔…一二五

二〇 萬葉時代の歌人その一……………新保 磐次…一二二

二一 萬葉時代の歌人その二……………一二七

二二 五丈原(韻文)……………土井 晩翠…一三〇

二三 孟子その一……………福本 日南…一三三

二四 孟子その二……………一四〇





# 大正國語讀本 卷九

## 一 國體の精華

穂積 八束

我が日本の國體と國民道德との基礎は祖先教に淵源す。祖先教とは祖先崇拜の大義を謂ふ。我が日本民族の固有の體制は血統團體たり。血統團體とは、民族が其の同始祖を敬愛するに由りて共存團體を成し、祖先の威力に服従するに由りて平和の秩序を維持するを謂ふ。小にしては家を成し、大にしては國を成すものなり。



祖先崇拜の大義は血統團體を構成し維持する原由たると同時に、血統團體の存續は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし、深遠にする成果あり。二者相待ちて消長し、須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝、友和、信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に原由し、血統團體を保維する軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は祖先教の基礎の上に立つ。これを千古に維ぎ萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

人は獨立孤存し得べき者にあらず、共同團結して、以て其の生存を全うす。而して其の團結する原由と形體とは固より一ならず。但し利害を以て集散し、約束を以て協和を維

持する者は、其の團結固からず、又久しからず。利害の異同は情況に隨ひて時に變轉し、人爲の約束はまた人爲を以て解除せらるゝを免れざればなり。血族相依るは自然の團結なり。兒孫が父母の保護の下に團欒するは社會の始にして、民族が同始祖の威靈の下に國を成すは天賦の團結たり。血脈相通ずるは天然の連鎖なり、人爲を以てこれを絶つことを得ず。利害の觀念の外に超越し、敬愛の至情に由りて離るべからざる共同生存を成す者は血統團體なり。血統は之を祖先に受け、之を子孫に傳ふ。故に其の團結は永久なり。血統關係は利害を以て離合斷續するを得ず。故に其の團結は鞏固なり。而して之を統一する者は祖先



の威力なり。故に子孫がその祖先に對するや、敬愛の情厚く、忠順の念深し。家に在りては、家長は祖先の威靈を代表し、家族に對して家長權を行ひ、國にありては、天皇は天祖の威靈を代表し、國民に對して統治權を行ふ。家長權と統治權とは共に君父が其の祖先の慈愛する子孫を祖先の威靈に代りて保護する權力なり。

吾人の今日あるは、吾人の祖先が血統團體を建設し、維持し、遺傳したる餘惠なり。何が故に血統相近き者が相依りて家を成し、氏族を成し、又國を成したるか。祖先を崇拜し、其の威力と慈愛との下に生存の保護を全うせんと欲する天性の至情に外ならざるなり。汝の父母を敬愛し、其の慈愛

なる保護の權力に従順なる至情は、延いて之を其の父母の父母に及すべし。吾人の祖先の祖先は即ち畏くも我が天祖なり。天祖は國民の始祖にして、皇室は國民の宗家たり。父母拜すべし、況や一家の祖先をや。一家の祖先崇拜すべし、況や一國の始祖をや。家長の位は、祖先の靈位にして、皇位は天祖の靈位なり。父母は現世に在る祖先たり、天皇は現世にある天祖たり。父母に孝なるべき所由は、即ち皇室に忠なるべき所由にして、之を一貫する國教は祖先の崇拜なり。此の大義は吾人の祖先が國家を成したる基礎にして、吾人が之を永遠に維持する軌道たるものなり。人は信仰に因りて動作す。限定せられたる人智は、宇宙の



現象を總合して之を其の根柢の眞理に歸結し、絶對の理法を自覺して行動すること能はざればなり。吾人の祖先は、肉體の外に不死の靈魂あることを確信し、又子孫を慈愛する父母の威靈は、顯界に於て其の肉體を喪ふとも、尙幽界に在りて其の子孫を保護することを確信したり。是、祖先崇拜の大義の淵源にして、敬神の我が國教たる所由なり。我が固有の國體・民俗、祖先の祭祀を重んずるより重きはなし。家は祖先の威靈の住む所、國は天祖の威靈の住む所にして、祖先の威靈は家國を防護す。吾人は祖先の生命の繼續にして、子孫は吾人の生命の延長たり。祖先の祭祀を不朽に絶たざるは、吾人の肉體に於て代表せらるゝ祖先の生存を

永遠に傳へんと欲するなり。祖先と吾人と子孫とが、家國の觀念に於て同化し、其の繁榮にして永久なる存在を全うする大義此に存す。祖先の靈位を現世に代表する君父に忠孝なるは、祖先に忠孝なるなり。君父が臣子を愛護するは、祖先が其の子孫を愛護するなり。夫婦の和、兄弟の友、民族の共愛、悉く皆我が同祖の祭祀を重んじ、之を永遠に傳へ、祖先の家國の鞏固にして永久なることを欲する祖先の遺志に適從する道ならざるはなし。我が祖先崇拜の大義は國民の確信に出で、不朽の國體は是に由りて其の基礎を立て、國民の道德は是に由りて深厚なり。斯の國斯の民を、千古に溯り萬世に互りて保持する者は、此の國體の精華たる



我が固有の祖先教の力なり。(愛國心)

二 山鹿素行と乃木大將 横山 健堂

乃木大將は、つねに、山鹿素行を尊信し、自費を投じて、その遺著を出版し、薨去前、東宮に謁して、その中朝事實を獻じたり。その素行を敬慕し、且、尊信の實を擧ぐること、また盡せりといふべし。然れども、大將は、無意味なる、素行の所説の鼓吹者にはあらず。よく素行の書を読み、默契し得たる人なり。想ふに、大將は、自ら求めて素行の言に合せんとしたるものにはあらざるべし。然れども、その人格態度は、素行の言を以て説明すれば、殊に感慨の深きを覺ゆ。素行の靈に

中朝事實  
素行の著、上  
下二篇十三章  
あり。

して、知ることあらば、必ず、大將を以て、理想的武士とするならん。

大將は、内に嚴霜烈日の如き精神を藏して、外に和風煦日の如き風貌を具へたり。大將を語るもの、その直接に識ると、識らざるとに關せず、大將を以て、高潔溫藉の人物となさざるはなし。素行、嘗て溫藉を説きて、大丈夫の、度量寛に、氣節大なるは、自然に溫潤の所あるべきなり。溫藉といふは、含蓄包容の意あるなり。即ち、内に、徳を含み、光を包みて、外に、圭角の見れざることなり。小智短才の輩は、器狭きを以て、わが智を立てて、人に誇り、世に衒ふ。度量氣象、眞によく萬物の上に卓爾たる者は、更に功を立て、名に誇る所あらず。



忿勵の氣、更になく、溫和自ら顔色に發し、物に交り人に伴なふ時は、陽春の麗にしてよく物を和するが如くならん。この故に、大丈夫の溫藉の徳ある者は、常に惠愛の念を失はず、人を救ひ、物を助け、天下の困窮流離するを見ては、我が身の苦あるが如くす。といへるもの、吾が輩乃木大將において、その好模型を見る。

素行またいはく、古人の、『月梧桐の上に至り、風楊柳の邊に来る。大丈夫この風流なかるべからず。』といひし風流は、風度をさしていへるなるべし。少しも拙く卑しき質なく、水精の瓶に、秋水を蓄へ、白玉の盆に、氷を盛りたらんが如く、聊かも隠れたる所なき風情、之を大丈夫の風度といふなり。内

鳶飛んで云

詩經に「鳶飛  
戾天、魚躍  
于淵。」

に詔ふところなく、外に屈する物なく、何處に行けども、その氣萬物の上に伸びて、鳶<sup>\*</sup>飛んで天に戻り、魚躍つて淵に入り、月の梧桐に來り、風の楊柳を誘ふに異ならず。かくの如き風度を養ひ得ずしては、一塵にも不染を免れんや。といへるもの、吾が輩大將において、その理想的風度あるを見る。またいはく、わが性質もとただ簡にして、禮容に乏しく、衣服、居宅、飲食、皆儉に過ぐ。といへるもの、大將の性質素朴にして、生活のただ簡疎なるに相似たり。

素行は聖教の極致、即ち人たる所以を説きて、仁にありとなせり。既に仁を人たる所以なりとすれば、士道の極致も、亦此に一致せずんばならず。仁既に極處たりとせば、仁



山鹿語録  
四十五卷。素  
行の談話を、  
門人の筆記し  
たるもの。

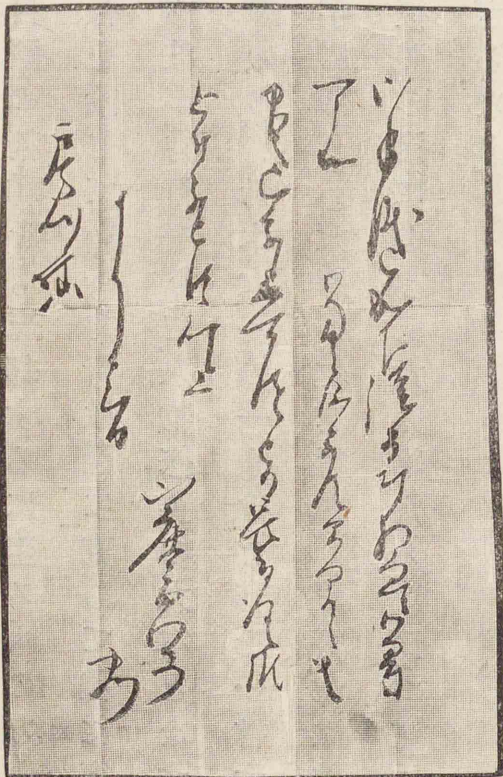


山鹿素行

り。又、學び知りて行はず、行ひて力めざるものは、即ち利口術數の徒なり」といへり。素行は常に力を極めて、利口・術數を排斥せり。曲學阿世者は、概ね利口・術數の徒なればなり。

を得る途如何。換言すれば、彼の理想とする人たる所以に達する修養は如何。彼はいふ、「力行これなり」と。山鹿語録の中、まづ世人の力行を缺く弊を説きて、「今日學者の通弊は、唯實を務むる一事の疎漫なるにあ

乃木大將も、また、利口・術數を蛇蝎視したるなり。素行又説いてはいはく、格物致知は知なり、誠意正心は行なり。



山鹿素行筆蹟

修身といふは知行相得て全きをいふ」と。又はいはく、聖人の學は、皆實を務むるに在り。これ淺近にし

て、日常、接物處事の間、に做し得らる。唯知の高見なきを以て、即ち實地の踐むべきなく、竟に異端の説に陥ると、これ



學者青年に對し、最も愷切なる説といふべし。知の高見なくして、異端に騁する者は、實地の踐むべきなきのみならず、自國の精神をも忘却するに至るものなり。素行は、次に、力行を論じていふ、力行は、己に克ちて禮に復るにあり。と。即ち彼が力行を以て、人物修養の大本となす精神は、極めて明瞭なり。乃木大將の一生は、これを一言すれば、唯、力行の二字にあり。大將が仁を得たりや否やは、姑く措き、その克己復禮の途に進みし大人物たるに至つては、些の疑をも容れざるなり。

力行は、本立ちて然る後有効なるなり。本の立たざる力行は、却つて効なし。乃木大將が力行の立本は如何。大將は

己に克ちて  
云云  
論語に「顏淵  
問仁。子曰  
克己復禮爲  
仁。」

士なり。士道の立本は、まづ、己の職分を知るにあり。素行いはく、魚蟲のいやしきも、草木の非情なるも、いづれか、徒爾にして、この世を終ふべき。若し力めずして、一生を終らば、大いなる賊民といふべし。職分は何ぞと、自ら省みて究明せんには、士の職分、おのづから著るべし。と。さては、士の職分とは何ぞや。素行いはく、凡そ士の職といふは、その身を顧み、主人を得て、奉公の忠を盡し、朋輩に交りて、信を篤くし、身の獨を慎みて、義を專とするにあり。と。乃木大將が一生の行事を検するに、極めて忠實に、わが職分を盡して、遂にこれに殉じたるを見る。その忠勇なる、その篤信なる、その謹慎なる、その義烈なる、誰か敢て企及すべき。されば、乃木大



將は、今代において、素行の理想に近き士ならずんばあらざるなり。

乃木大將は、素行の所説を鼓吹するに、いたづらに言を以てせず、躬行實踐して、直ちにその模範を示したり。素行を以て、舊日本における、武士道の大家組織の大家なりとすれば、乃木大將は、新日本における武士道傳道の大人物なりといふべし。  
(大將乃木)

三 建武中興論 その一 源 親 房

平治  
二條天皇の年  
號。(一八九)

平治\*より後、平氏世を亂りて二十六年、文治\*の始め頼朝權を專らにせしより、父子相つぎて三十七年、承久\*に義時世をと

文治

後鳥羽天皇の  
年號。(八四一—  
一八四)

承久

順德・仲恭兩  
天皇の年號。  
(一七九—一八二)

この天皇

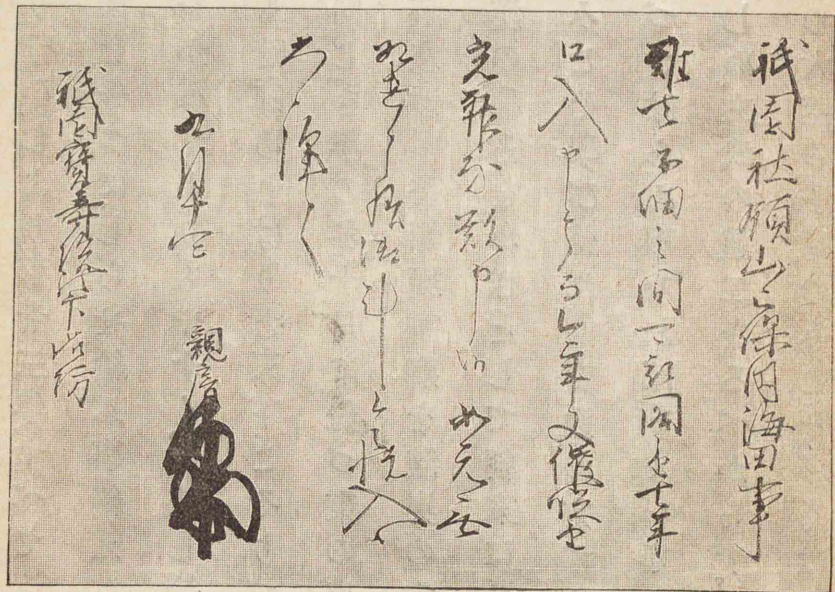
後醍醐天皇

同じき年

延元三年  
(一九三)

り行ひしより百十三年、すべて百七十餘年の間、おほやけの世を一つにしらせ給ふ事絶えにしに、この天皇の御代に、掌をかへすよりもやすく、一統し給ひぬる事、宗廟の御計らひも時節ありけりと、天下こぞりて仰ぎ奉りけり。  
同じき年の冬十月に、先づ東の奥をしづめらるべしとて、參議左近中將源顯家卿を陸奥の守になして遣さる。代々和漢の稽古をわざとして朝家に仕へ、政務にまじはる道をのみこそ學び侍れ。吏途の方にもならず、武勇の藝にもたづさはらぬ事なれば、度々いなみ申ししかど、公家既に一統しぬ、文武の道二なるべからず。昔は皇子・皇孫もしは執政の大臣の子孫のみこそ、多くは軍の大將にもさゝれしか、今





より武を兼ねて藩屏たるべし。と仰せ給ひて、御みづから旗の銘をかゝしめ給ひ、様々の兵器をさへ下し給はる。任國に赴く事も絶えて久しく成りにしかば、古き例をたづねて罷申の儀あり。御前に召し勅語有りて、御衣・御馬などを給はりき。猶奥のかため

にもと申しうけて、御子を一所伴なひ奉る。かけまくもかしこき今上皇帝の事なれば、こまかには記さず。かの國につきにければ、誠におくの方ざま兩國をかけて、皆靡きしたがひにけり。同じき十二月左馬頭源直義の朝臣、相模守を兼して下向す。これも四品上野の太守成良親王を伴なひ奉る。この親王後に暫く征夷大將軍を兼ねさせ給ふ。直義は高氏が弟なり。抑かの高氏御方に参りしその功は、誠に然るべし。すずろに寵幸ありて抽賞せられしかば、偏に頼朝卿天下を鎮めしまゝの志にのみ成りにけるにや。いつしか越階して四位に叙し、左兵衛督に任ず。拜賀のさきにやがて従三位



して、程なく參議從二位までにのぼりぬ。三箇國の吏務守護及びあまたの郡庄を給はる。弟直義左馬頭に任じ、從四位に叙す。

「昔頼朝ためしなき勳功ありしかど、高位・高官にのぼる事は亂政なり。果して又子孫も早く絶えぬるは、高官のいたすところか」とぞ申し傳へたる。「高氏等は頼朝・實朝が時に親族などとして、優恕する事もなし、唯家人の列なりき。實朝の八幡宮に拜せし日も、地下前駈二十人の中に相加れり。たとひ頼朝が後胤なりとも、今更登用すべしとも覺えず。況や久しき家人なり、さしたる大功もなくて、かくやは抽賞せらるべき」とあやしみ申す輩もありけるとぞ。

介子推  
五朝の一人な  
る晉の文公の  
功臣。

關東の高時、天命既に極りて、君の御運を開きし事は、更に人力といひがたし。武士たる輩いへば數代の朝敵なり。御方に參りてその家を失はぬこそ、あまりある皇恩なれ。更に忠をいたし、勞をつみてぞ、理運の望みをも企て侍るべき。然るを天の功を盗みて、己が功と思へり。介子推が戒も、習ひ知るものなきにこそ。かく高氏が一族ならぬ輩もあまた昇進し、昇殿をゆるさるゝもありき。されば或人の申されしは、公家の御世にかへりぬるかと思ひしに、中々猶武士の世に成りぬる」とありき。

凡そ政道は正直・慈悲を本として、決斷の力有るべきなり。これ天照大神の明かなる御教なり。決斷といふにとりて



數多の道あり、一つにはその人を選びて官に任ず。官にその人ある時は、君は垂拱してまします。されば本朝にも異朝にも、これを治世の本とす。二つには國郡を私にせず、分つ所必ずその理のまゝにす。三つには功あるをば必ず賞し、罪あるをば必ず罰す。これ善を勧め悪を懲す道なり。これに一つもたがふを亂政とはいへり。上古には勳功あればとて、官位を進むる事はなかりき。常の官位の外に勳位といふ品を置きて、一等より十二等まであり。無位の人なれど、勳功高くて一等にあがれば、正三位の下、從三位の上に列なるべしとぞ見えたる。又本位ある人のこれを兼ねたるもあるべし。官位といへるは、上三公

より下諸司の一分に至る、これを内官と云ふ。諸國の守より史生郡司に至る、これを外官と云ふ。天文にかたどり地理に法りて、各つかさどる方あれば、その才なくては任用せらるべからざる事なり。「名と器とは人にかさず」とも云ひ、「天のつかさに人それ代る」ともいひて、君の濫りに授くるを謬舉とし、臣のみだりに受くるを尸祿とす。謬舉と尸祿とは、國家の破るゝ階、王業の久しからざる基なりとぞ。中古と成りて、平の將門を追討の賞にて、藤原秀郷正四位下に叙し、武藏下野兩國の守を兼ね、平貞盛正五位下に叙し、鎮守府將軍に任ず。安倍貞任奥州をみだりしを、源賴義の朝臣十二年まで戦ひて、凱旋の日正四位下に叙し、伊豫守に任



ず。かれらその功高しといへども、一任四五箇年の職なり。これ猶上古の法にはかはれり。保元の賞には、義朝左馬頭に轉じ、清盛太宰大貳に任ず。この外受領、檢非違使になれるもあり。この時にや既に亂りがはしき始と成りにけむ。平治よりこのかた皇威殊の外に衰へぬ。清盛天下の權を盜み、太政大臣にあがり、子供大臣大將になりしうへは、いふに足らぬ事にや。されど朝敵になりて、やがて滅亡せしければ、後の例にはひきがたし。

四 建武中興論 その二

頼朝は更に一身の力にて、平氏の亂を平げ、三十餘年の御憤

可美眞手命  
饒速日命の御  
子。  
大織冠  
藤原鎌足。

經基  
清和の皇子な  
る貞純親王の  
子。  
承平の亂  
承平年間藤原  
純友反す。承  
平は朱雀天皇  
の御代。  
忠文  
參議藤原忠  
文。

をやすめ奉りき。昔神武の御時に可美眞手命の中州をしづめ、皇極の御宇に、大織冠の蘇我の一門を亡して、皇家を全くせしより後には、類なき程の勳功にや。それすら京上りの時大納言大將に任ぜられしをば、固く否み申しけるを、おしてなされにけり、公私のわざはひにや侍りけむ。その子は彼が跡なれば、大臣大將になりて頓て亡びぬ、更に跡といふものなし、天意には違ひにけりと見えたり。君もかゝるためしを始めさせ給ひしによりて、大功なき者までも、皆かかすべき事と思ひあへり。

先祖經基は、近き皇孫なりしかど、承平の亂に、征東將軍忠文の朝臣が副將としてかれが節度をうく。それより武勇の



經基滿仲

賴光

賴信賴義

義家義親

爲義義朝

賴朝賴家

實朝

家となる。その子滿仲より、賴信、賴義、義家相續ぎて、朝家の  
 かためとして久しく召し仕はる。上にも朝威ましく、下  
 にもその分に過ぎずして、家を全くし侍りけるにこそ。爲  
 義に至りて、亂にくみして誅にふしぬ。義朝又功を立てむ  
 とて滅びにき。先祖の本意に背きける事は疑ひなし。さ  
 ればよく先蹤を辨へ、得失を考へて、身を立て家を全くする  
 こそ賢き道なれ。愚なる類は清盛、賴朝が昇進するをみて、  
 皆かく有るべき事と思ひ、爲義、義朝が逆心を好みして、亡び  
 たる故を知らず。近頃伏見の御時、源爲賴と云ふをのこ、内  
 裏に參りて自害したりしが、かねて諸社に奉れる箭にも、そ  
 の夜射ける箭にも、太政大臣源爲賴と書きたりし、いとをか

しき事に申すめれど、人の心の亂りになり行く姿は、これに  
 ておしはかるべし。

義時などはいか程もあがるべくやありけむ、されど正四位  
 下左京權太夫にてやみぬ。まして泰時が世になりては、子  
 孫の末をかけて、よくおきて置きければにや、滅びしまでも、  
 終に高官にのぼらず、上下の禮節をみだらず。近く維貞と  
 いひしもの吹嘘フキウによりて修理の大夫になりしをだにも、い  
 かがと申しけるが、誠にその身もやがてうせ侍りにき。父  
 祖のおきてにたがふは、家門を失ふしるしなり。  
 人は昔を忘るゝものなれど、天は道を失はざるなるべし。  
 さらばなどて天は正理のまゝには行はれぬと云ふ事、疑は



しけれど、人の善悪は自らの果報なり、世のやすからざるは、時の災難なり。天道も神明も、いかにもせぬ事なれど、邪なるものは久しからずして亡び、亂れたる世も正にかへるは、古今の理なり。これをよく辨へ知るを稽古といふ。

昔、人を選び用ひられし日は、先づ徳行を盡す、徳行同じければ才用あるを用ひ、才用等しければ勞効あるをとる。又徳義・清慎・公平・恪勤の四善をとるとも見えたり。又格條には朝に厮養たれども、夕に公卿に至ると云ふ事の侍るも、徳行・才用によりて、不次に用ひらるべき心なり。寛弘＊よりあなたには、誠に才賢ければ、種性にかゝはらず、將相に至る人もあり。寛弘以來は譜第を先として、その中に才もあり、徳も

寛弘

一條天皇の年  
號。藤原道長  
の隆盛時代。  
(六五—七二)

ありて、職に適ひぬべき人をぞ選ばれける、世の末に亂りがはしかるべきことを、誡めらるゝにやありけむ。

七箇國の受領を経て、合格して公文と云ふ事かんがへぬれば、參議に任ずと申しならはしたるを、白河の御時、修理正顯季といひし人、院の御乳母の夫にて、時のきらならぶ人なかりしが、この勞をつのりて、參議を申しけるに、院の仰に、それも物書きての上の事とありければ、理にふして止みぬ。この人は歌道なども譽ありしかば、物かゝぬ程の事やはあるべき。又參議になるまじき程の人にもあらじなれど、和漢の才學のたらぬにぞありけむ。白河の御代までは、よく官を重くし給ひけりと聞えたり。



あまり譜第をのみとられても、賢才の出でこぬはしなれば、上古に及びがたき事を恨むるやからもあれど、昔のまゝにてはいよく亂れぬべければ、譜代を重くせられけるも理なり。但し才も賢く徳もあらはにして登用せられむに、人の謗あるまじき程の器ならば、今とても非重代によるまじき事とぞ覺え侍る。その道にはあらで、一旦の勳功などいふばかりにて、武家代々の陪臣をあげて高官を授けられむ事は、朝議のみだりなるのみならず、身のためにも能く慎むべき事とぞ覺え侍る。

會、一統の世に復りぬれば、此の度ぞ古き弊をも改められぬべかりしかど、それまでは剩への事なり。今は本所の領と

いひし所々さへ、皆勳功に混ぜられて、累家も殆ど其の名許りに成りぬるもあり。これ皆功に誇れる輩、君をおとし奉るに依りて、皇威もいとど軽くなるかと思えたり。かゝればその功なしといへども、古より勢ある輩をなつけられむ爲にか、或は本領なりとて給へるもあり、或は近境なりとて望むもあり。闕所を以て行はるゝに足らざれば國都につきたりし地、若しは諸家相傳の領までも、きほひ申しけりとぞ。治らむとして彌亂れ、安からむとして益、危くなりける末世の至りこそ誠に哀しく侍れ。(神皇正統記)

五 朗 詠



早春

氣霽風梳新柳髮 氷消浪洗舊苔鬚 (都良香)

山風にとくる氷のひまごとに

うちいづる波や春の初花 (正證)

春興

野草芳菲紅錦地 遊糸繚亂碧羅天 (劉禹錫)

もゝしきのおほみや人は暇あれや

櫻かざしてけふもくらしつ (赤人)

夏夜

風吹枯木晴天雨 月照平沙夏夜霜 (白)

夏の夜の臥すかとすれば時鳥

鳴く一聲にあくるしのゝめ (貫之)

螢

螢火亂飛秋已近 辰星早沒夜初長 (元稹)

草ふかきあれたるやどのともしびの

風に消えせぬ螢なりけり (赤人)

秋興

林間煖酒燒紅葉 石上題詩拂綠苔 (白)



秋はなほ夕まぐれこそ唯ならね

萩のうはかぜ萩のしたつゆ (義孝少將)

秋興

林石煖酒燒紅葉石上頻倚榻  
綠苔白  
あしけれほゆふまわれふ  
ふしれうもせもよれ  
義孝少將

集詠朗漢倭

秋月

秋水漲來船去速 夜雲收盡月行遲 (鄧展)

鄉淚數行征戎客 棹歌一曲釣漁翁 (保胤)

白雲にはねうちかはし飛ぶ雁の

かずさへ見ゆる秋の夜の月 (躬恒)

擣衣

北斗星前横旅雁 南樓月下擣寒衣 (劉元叔)

から衣打つ聲聞けば月きよみ

まだ寝ぬ人をそらに知るかな (貫之)

雪

曉入梁王之苑雪滿郡山

夜登庾公之樓月明千里 (謝觀)

雪似鷺毛飛散亂 人被鶴氅立徘徊 (白)



みよしの、山の白雪つもるらし

ふるさと寒くなりまさるなり (是則)

六 インスピレーション 感 その一 徳 富 蘇 峰

人は常に我が胷中の秘密を語らんとす。或は語らんと欲してこれを語る者あり、或は語る事なからんと欲して語る者あり。有心無心の差別は有れども、胷中の秘密は決して長く胷中に隠伏する者にはあらず、口に顯れざれば舉動に顯れ、舉動に顯れざれば容貌に顯る。

蓋し人の有する四肢・五官は、總べてこれ心中の秘密を顯す廣告者なり、吹聴者なり。如何に口に樂しと云ふとも、額に

巨勢金岡  
平安朝の畫家

皺の寄る、我その憂あるを知る。如何に無頓著なる風を爲すとも、頬に笑窪の立つ、我その樂しみあるを知る。或は溜息となり、或は苦笑となり、或は赤面し、或は青筋を立つ。これ豈爲にする事ありて爲さんや。その胷中の秘密は、自ら抑へんと欲して抑ふる能はず、直ちに此等の機關を透して自ら顯れ出でたるのみ。思を陳ぶる、何ぞ必ずしも三寸の舌のみならんや。情を敘づる、何ぞ唯一枝の筆のみならんや。總べて眼に閃き、顔に映じ、手に動き體に發する者、皆是我が深微なる幽懷を述ぶる一の文章と謂はざるべからず。啻にこれのみならず、繪畫・彫刻・建築・音樂・詩歌・文章・宗教の如き、皆これ人心の反應たるに過ぎず。例せば巨勢金岡が風



牧谿 南宋の畫僧。  
Michel-Angelo  
St. Peter

Mi on  
杜甫 字は子美、唐の詩人。  
施耐庵 元朝初期の小説家、水滸傳の著者。

雷神の圖に於ける、牧谿が洞庭秋月の圖に於ける、ミケラン  
ジェロがセント、ペテル寺の壁畫に於ける、豈必ずしも己が  
胷中を白狀せんが爲にこれを畫きたるものならんや。然  
れども彼等が筆を執り、刷毛を揮ひ、繪具を紙若しくは布に  
接する時には、己が胷中に有るもの、直ちに自家の胷臆を排  
してこの畫中に映出せしなり。風雷神の英姿颯爽たる、洞  
庭秋月の神韻縹緲たる、セント、ペテル寺壁畫の莊嚴雄麗な  
る、これ先づ彼等の胷中に、風雷神あり、洞庭あり、上帝あり、而  
して心に充ち、手に溢れて、遂にかくの如き絶妙の畫圖を生  
ずるに至りしなり。豈唯これのみならむや。ミルトンの  
「失樂園」に於ける、杜甫の蜀中の詩に於ける、施耐庵が水滸傳

Hugo  
Beethoven  
Wagner  
Moscow  
Pyramid  
Hamilton

に於ける、ユーゴーが「噫無情」に於ける、ベトローヴェン・ワグネ  
ルが音楽に於ける、或は奈良の大佛の如き、或はモスコイの  
大鐘の如き、或は埃及のピラミッドの如き、或は萬里の長城  
の如き、その事物の偉大絶倫なるにも拘らず總べて、これ人  
の胷中より生じたる幻影に過ぎざるなり。人唯その現象  
の偉大絶倫なるに驚歎して、卻つてこの現象を生じたる人  
の心の更に偉大絶倫なるを知らず。蓋し偉大なる事物は  
偉大なる心より生じ、美妙なる現象は美妙なる心より生ず  
ハミルトン曰く、世界に於て人より大いなるものは無く、人  
に於て心より大いなるものは無し」と。吾人實にその然る  
を信ず。而してこの心にして、又突如として、我自ら我たる



李將軍  
名は廣

を忘れ、我自ら我より超越するに至ることあり。これを靈感と云ふ。靈感とは即ち人の思想感情の高潮にして、凡そ世の英雄・豪傑・孝子・烈婦・忠臣・義士・熱心なる宗教家・美術家・冒險者の如き人々が、人を驚かし、世界を驚かすの事業を爲すや、必ずこの時にあらざるはなし。唯この靈感の爲に鼓動せられたる數分時の行爲は、器械的に働きたる幾年月の行爲に優るは、吾人が常に信ずる所なり。史記の李將軍<sup>\*</sup>列傳に曰く、

廣出獵、見草中石、以爲虎射之、中石沒鏃。視之石也。因復更射之、終不能復入石矣。

と。蓋し石に中り鏃を沒するは、李將軍が平生の技倆にあ

らず。乃ちこの電光一揮、羽箭空を飛ぶの閒こそ、以て靈感の働を察すべきなれ。

七 靈感 その二

靈感の大いなる力は、殊に品性の上に顯る。世の平凡なる歴史家若しくは傳記家の如きは、往々英雄人を籠絡すと云ひ、而してその籠絡は、斯くの如き手段、斯くの如き工夫にて爲せりとて、さも誇り氣に述立つ。然れども試みに彼等に問ふ可し、若し斯くの如き術にて出來得べき事ならば、一たびその術を傳習するに於ては、恰も大工の術を學べば大工となるが如く、鍛冶屋の術を學べば鍛冶屋となるが如く、籠



趙翼 清の學者、政治家。  
 劉 劉備の事。字は玄徳、國の主。  
 亮 諸葛孔明。

絡の術を學べば英雄となること容易なるべきか。殊に夫子自らは斯く英雄の祕術さへ評き出したる人なれば、自らこれを行ひて英雄たるには容易なるべき筈なるに、彼等は英雄の技倆を見抜き、その技倆の存する所を解剖しながら、自ら英雄の事を行ひ、英雄たる能はざるは何ぞや。知るべし、英雄人を籠絡すと云ふが如きは、決して智術に依るに非ず、即ち云ふに云はれぬ靈感のありて、その人に接するや、電氣の物に觸るゝが如く、磁氣の物を吸ふが如く、離れんとするも離るゝ能はざらしむることを。趙翼嘗て二十二史劄記に於て劉を論じて曰く、至託孤於亮曰、嗣子可輔輔之、不可輔則君自取之。千載之

孫權 字は仲謀、吳主。  
 曹操 字は孟徳、魏主。  
 Caesar  
 Cromwell  
 Gladstone

韓柳 韓退之と柳宗元。  
 蘇轍 蘇東坡の弟、子由。

下猶見其肝膈本懷。豈非眞性情之流露。と。豈獨り劉備のみならんや。孫權と雖も、曹操と雖も若しくはシーザーと雖も、クロムウエルと雖も、グラッドストーンと雖も、皆然らざるは無し。これを要するに、かの傍人が英雄の行爲に就きて種々器械的の評論を試みるは、恰も下等なる批評家が文章軌範の評釋を爲すが如く、漫に自家の智臆を以て彼此の批評を爲し、恰も韓柳の諸名家は定規を以て文章を作りたるかの如く、雙關法と云ひ、抑揚頓挫の法と云ひ、波瀾擒縱の法と云ふ。焉んぞ知らん、皆これ後人の牽強附會に過ぎざるを。彼等豈始より斯くの如き法に據りて文を作らんや。即ち蘇轍が、



豈嘗執筆學爲如此之文哉。其氣充乎其中而溢乎其貌、動乎其言而見乎其文、而不自知也。

といへる類なるのみ。靈感の繪畫に顯るゝときには繪畫我を顯すに非ず、我即ち繪畫に顯るゝなり。文章に於ても亦然り。我の思想を寫し出すに非ず、我即ち文章に顯るゝなり、我が生命即ち文章に顯るゝなり。例せば伊蘇普の譬喩の如く、或は獅子となり、或は狐となり、或は狼となり、或は鼠となり、その顯るゝ所千變萬化すと雖も、要するに一の圓滿・美妙なる伊蘇普の智慧自らこの間に發揮するのみ。吾人はこれを讀んで、その狼たると狐たるとを見ず、唯一の伊蘇普たるを見るのみ。

伊蘇普  
紀元前六世紀  
のギリシヤ人  
なりといふ。

蓋し靈感は神力なり、哲理的に、數理的に、科學的に、分解説明する能はざる不可思議力なり。世の中の哲學者は不可思議力を退治せんと心掛け、中には大早計にも、最早世間には不可思議力は無しなどと言ふ人すら出て來れり。然れども不可思議の領地は未だ容易に縮まるを見ず。勿論鬼神と思ひたる雷電も、今は之を使役し、神怒と思ひたる地震も地中の火力作用なりと解説し、斯くの如く理學の進歩と共に多少世の所謂不思議なる物は除去せられたるが如しと雖も、その實は決して然ることなし。即ち人とは如何なるものか、何處より來れるか、何處に行くか。疑問茲に到らば、人彼自身も亦一の解釋する能はざる問題と云はざるを得



ざるべし、人にして斯くの如しとせば、この人が不可思議  
 力に支配せらるゝも、亦何ぞ深く疑ふを用ひむや。蓋し靈  
 感は神力なり、我自ら我より超越し、人自ら人より超越し、人  
 間にあつて天使に類する行をなすが如きは皆この靈感に  
 本づく者なり。  
 然らば靈感を養ふ道ありや。靈感の來る恰も風の如し。  
 人これを捕ふる能はず。然りと雖も、若しこれを得る道有  
 りとせば、吾人はただ一あるを知るのみ。曰く純一これな  
 り。これを詳言すれば、脇目も振らず、忠純專一、一所懸命に  
 働くことこれなり。吾人嘗てユーゴの語を聞く、曰く、婦  
 人は弱し。然れども母は強し」と。弱き婦人も母となれば

Jeannie d' Arc

四月二十日

承久三年

帝

順徳天皇

春宮

仲恭天皇

強きは何が故ぞ。唯その幼兒を愛する一念は、弱き婦人を  
 して勇氣を生ぜしむるにあらずや。至誠は神明に通ず。  
 凡そ人眞面目になり、純一になり、一生懸命になる時に於て  
 は弱き人も強く、愚なる人も知に、無用の人も有用となるな  
 り。即ち火事場に於て主婦が俄かに力を生じて、箆笥を持  
 運ぶが如き、<sup>\*</sup>ジョアン嬢が佛國田舎の一女子を以て英國の  
 大軍を退けたるが如きは、唯これ有るが爲のみ。

(靜思餘録に據る)

八 新島守 その一

<sup>\*</sup>四月二十日、<sup>\*</sup>帝おりさせ給ひ、<sup>\*</sup>春宮四つにならせ給ふに譲り



御兄の院

土御門院。

父みかど

後鳥羽院。

家實

近衛基通の

子。

道家

後京極良經の

子。

あづまの若

君

當時の將軍頼  
經、鎌倉に居  
る。

申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつれば、これ  
もめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日院號のさ  
だめありて、今おりさせ給へるを新院ときこゆれば御兄の  
院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞきこえさする。  
このほどは家實のおとど關白にておはしつれど、御讓位の  
時、道家のおとど攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御  
父なり。  
さても院のおほし構ふること、忍ぶとすれどやう／＼漏聞  
えて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの  
代官にて伊賀の判官光季といふものあり。かつがつかれ  
を御勘じのよし仰せらるれば、身方に參りつるつは者ども

押寄せたるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづい  
とめでたしとぞ院はおぼしめしける。  
あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて、身の失す  
べき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻めきたりな  
む時に、はかなきさまにて屍を暴さじ。おほやけと聞ゆと  
も、みづからしたまふことならねば、かつはわが身の宿世を  
も見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と  
二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて都にのぼす。泰  
時を前に据ゑていふやう、おのれをこのたび都にまゐらす  
るは思ふところ多し。本意の如く清き死にをすべし。人  
にうしろ見えなむには、親の顔また見るべからず。今をか







公經の大將  
藤原氏、西園寺家の祖。  
 御うまご  
將軍賴經を云ふ。賴經は公經の女の出なり。  
 故大將  
賴朝をいふ。  
 義朝  
賴朝の女(室保藤原)  
 七條院  
藤原殖子、後鳥羽院の御母。  
 修明門院  
藤原重子、順徳院の御母。

へ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將ひとりのみなむ、御うまごのこともさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり、その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕きこととあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ／＼あまたきこゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、このほかの上達部にも殿上人にもあまたありき。中院はあかて位をすべり給ひしより、言にいでてこそ物し

たまはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊にまじらひ給はざめり。新院はおなじ御心にて、よろづいくさの事なども掟ておほせられけり。

九 新島守 その二

いつの年よりも五月雨はれ閒なくて、富士川、天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打ちわたしがたければ、攻めのぼる武者どももあやしくなやめり。かゝれども遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや宇治勢多へ分ちつかはす。世の中ひびきのゝしるさま言の葉もおよばず、まねびがたし。あ

富士川  
駿河國にあ  
 天龍  
天龍川の事。遠江國にあ



るはふかき山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて  
 やすげなく騒ぎ満ちたり。いかがあるむと君も御心みだ  
 れておぼしまどふ。かねてはたけく見えし人々も、誠のき  
 はになりぬれば、いと心あわただしく色を失ひたるさまど  
 もたのもしげなし。六月二十日あまりにや、いくばくの戦  
 だになくて、遂に身方のいくさやぶれぬ。あら磯にたか潮  
 などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、い  
 はむ方なくあきれて、上下ただ物にぞあたりまどふ。  
 あづまよりいひおこするまゝに、かのふたりの大將軍はか  
 らひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷した  
 てまつるべしときこゆれば、女院宮々、所々におぼしまどふ

鳥羽殿

山城國紀伊郡  
鳥羽にあり  
き。いはゆる  
城南の離宮な  
り。  
ものにもが  
なや云々  
源氏物語河海  
抄に「とりか  
へす物にもが  
なや、世の中  
を、ありしな  
がらのわが身  
と思はむ。」

信實朝臣  
藤原氏。

事さらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥  
 羽殿へ、網代車のあやしげなるにて七月七日いらせ給ふ。  
 今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。「もの<sup>\*</sup>に  
 もがなや」とおぼさるゝもかひなし。その日やがて御ぐし  
 おろす。御とし四そぢに一つ二つやあまらせ給ふらむ。  
 まだいとをしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して御す  
 がたうつしかかせらる、七條院にたてまつらせ給はむとな  
 り。かくて同じき十三日に御舟にたてまつりて、遙かなる  
 波路をしのぎおはします御心ち、この世のおなじ御身とも  
 おぼされず。いみじう、いかなりける代々のむくいにかと  
 うらめし。



畑  
土佐の國の西  
南に在る幡多  
郡を中世に土  
佐畑と稱し、  
貴人の配處た  
りき。

新院も佐渡國にうつらせ給ふ。上達部殿上人それより下  
はた残るなく、このことに觸れたるたぐひは、重く軽く罪に  
當る様いみじげなり。中院は初よりしろしめさぬことな  
れば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに移らせたま  
ひぬるに、のどかにて都にてあらむこといとおそれありと  
おぼされて、御心もて、その年閏十月十日土佐の國の畑とい  
ふ所に渡らせ給ひぬ。  
本院は四つにて位につき給ひて、十五年おはしましき。お  
り給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はお  
なじ事なりしかば、すべて三十八年が程、この國のあるじと  
して、萬機のまつりごとを御心ひとつにをさめ、百の官をし

津の國云云  
津の國のこや  
とも人をいふ  
べきに、隙こ  
そなけれ蘆の  
八重葎。  
(後拾遺集、和  
泉式部)

たがへ給へりしそのほど、吹く風の草木をなびかすよりも  
まされる御ありさまにて、遠きをあはれみ、近きをなで給ふ  
御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまな  
きまつりごとをきこしめすにも、難波の葎の亂れざらむこ  
とを思しき。藐姑射の山の峯の松もやうく、枝をつらね  
て、千代に八千代をかさね、霞のほらの御住居、いく春をへて  
も空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべか  
りける世を、ありありてよしなき一ふしに、今はかく花の都  
をさへ立ちわかれ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に  
軒をならべて、おのづからこととふものとは、浦に釣する  
あま小舟、鹽やく煙のなびくかたをも、わがふる郷のしるべ



かとはかり、ながめすごさせたまふ御すまひどもは、それま  
でと月日をかぎりたらむだに、あす知らぬ世のうしろめた  
さに、いと心ぼそかるべし。ましていつをはてとかめぐり  
あふべきかぎりだになく、雲の浪、けぶりの浪のいく重とも  
知らぬ境に世をすぐしたまふべき御さまども、口惜しとい  
ふもおろかなり。

このおはします處は、人ばなれ、里とほき島の中なり。海づ  
らよりはすこしひき入りて、山かげにかたそへて大きやか  
なるいはほのそばだてるをたよりにて、松の柱に葦茸ける  
廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴のいほり  
のただしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる

柴のいほり  
云々  
いづこにも住  
まれずばた  
すまであらむ  
柴の庵のしば

しなる世に。  
(新古今集、僧  
西行)

水無瀬殿  
本院の造り給  
ひし殿、舞津  
國三島郡島本  
村大字廣瀬に  
ありき。  
二千里の外  
云々

三五夜中新月  
色、二千里外  
故人心。(和  
漢朗詠集白樂  
天)

一院  
後鳥羽法皇。  
新院  
順徳上皇。

かたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬  
殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらる  
る海の眺望<sup>\*</sup>二千里の外ものこりなき心ちする、今さらめき  
たり。しほ風のいとこちたく吹きくるをきこしめして、  
われこそは新島もりよおきの海の  
あらしなみ風こころして吹け  
同じ世にまたすみのえの月や見む  
けふこそよそにおきのしま守 (増鏡)

一〇 眞野の陵 その一 熊田葦城

<sup>\*</sup>一院既に隱岐に下らせ給ひければ、新院にも七月二十二日



寺泊  
越後國三島郡  
の海岸にあ  
り。

を以て佐渡へ遷幸あらせ給ふ。供奉の面々には冷泉中將  
爲家・花山院少將能久、上北面には甲斐右兵衛佐則經・藤左衛  
門太夫安元、女房には右衛門佐局以下三人とぞ定めらる。  
頼みがたきは今日此の頃の空と人の心、冷泉中將は京に留  
りて御見送をだに爲さず、花山院少將は勞ることありとて  
途中より京に立還る。世におはします間はかくも情なく  
は無かりしものを、唯さへ少き供奉のなほ残りぬれば、新院  
いとど御心細くぞ思し召さる。北地に入れば秋も早し、梢  
を拂ふ風の聲、草間に啣く虫の音も皆御涙をぞ打誘ふ。  
日數經て越後の寺泊へと着かせ給ふ。海上を望ませ給へ  
ば、一つの島近く前面に横たはる、是こそ佐渡が島なれ。」と聞

し召されし時の御心地如何なりしぞ、察し奉るだに涙自ら  
湧きいでぬ。

此處より御船に召されけるに、右兵衛佐則經重き病になや  
みければ、新院哀に思し召されて、此の地に留めさせ給ひけ  
るに、間もなく歿かりけるこそ果敢なけれ。頓て佐渡に着  
きて國分寺に入らせ給ふ。浪荒く、風凄き斯かる邊土に渡  
らせ給ひては、御心細さも一入深ければにや、御送りの武士  
は言へば更なり、輿丁の末にまでも御名残を惜しませ給ひ、  
今日ばかり、明日ばかりと引留めさせ給ふ。世が世ならば  
御後姿を拜し奉るだに眼潰るゝ心地するものを、斯くまで  
懐かしう思召し給ふかと察し奉りては、何れも感涙留めあ

國分寺  
佐渡眞野町大  
字國分寺。



へず。「さらば御先途をこそ見奉るべけれ」と餘りの御憫は  
しさに、足を此の土地に留むるものさへあり。御供に候ひ  
ける遠藤左衛門尉爲盛となん呼べる武士、

君ませばこゝも都と思ふにぞ

わがふる里は戀しくもなき

と詠み出で、家をも思はず、妻子をも忘れて冊き奉れるぞ健  
氣なる。やがて和泉村なる黒木の御所に徙らせ給ひてよ  
りも、朝な夕なに京の空を戀ひ給ふ。行く雲、歸る雁、皆御涙  
の種とならぬはなし。そこゝの叢より白菊の嬌らしきを  
掘取りて、御庭に移し植ゑさせ給ふ。此の花愛てさせ給  
ふ間のみ、暫し京の事思ひ出でさせ給はねばにや、「都わすれ」

和泉村  
今は金澤村の  
管内にあり。

と名づけ給ひて、朝夕御手づから水を澆がせ給ふぞ畏き。  
心に憂あれば、歌に懷を寄す、新院敷島の道に長けさせ給ひ  
ければ、折に觸れては和歌を詠み出でて、せめてもの心遣り  
となし給ふ。此の國に着かせ給ひける時、かくなん、

いざさらば磯うつ波に言問はむ

おきのかたには何事かある

夏の夕暮、杜鵑二聲三聲啼いて過ぎければ、新院又も京の事  
を思し出でて、斯くなん遊ばしつる、

啼けば聞く聞けば都の戀しきに

この里すぎよ山ほととぎす

隠岐にては蛙の啼く音を止め給ひ、此處にては杜鵑の啼く



音をぞ止め給ふ。鳥虫すら尙感じ奉るものを、など鎌倉の感ぜざる。

一一 眞野の陵 その二

眞野の浦曲は此の國第一の勝地と聞えければ、折節は濱邊に出でて、遠山・近海の風光を眺めさせ給ふ。奇石・怪巖多きが中にも、特に御目に留りし岩三つばかりあり。「こは御舟石とこそ呼ぶべけれ。」と仰せ給へる石は、長さ三間、幅二間ばかり、其の面少しく凹みて、宛ら舟に似たり。「これなん御馬石と名づくべき。」と宣はせるは、長さ二間、幅九尺ばかりにて馬の蹲まれる如きの石、御舟石より二丁ばかりの東に在り。

眞野の浦  
佐渡の西側に  
在る灣を眞野  
灣と稱し、其  
の海濱を眞野  
の浦といふ。

「こは狎石とこそ申すべけれ。」と仰せけるは實に狎の臥するに似て、長さ一間横四尺許りの石なりけり。岩に登り汀に下りて興じ給ふ折柄、不圖御小刀を海中に落させ給ひければ取り敢へず斯くなん、

東の間も身を放たじと契りしを

なみの底にもさや思ふらむ

憂ある身は何事か御涙の種ならざるべき、畏さはこればかりかは、或時民家に立寄せ給ひけるとき、  
斯くまでに身の暖まる草の實を

ひえの粥とは誰か言ふらむ

とぞ遊ばしける。九五の御位に躋らせ給へる御身をもて、



御父  
後鳥羽上皇。  
御兄  
土御門上皇。

斯かる物をも召させ給ひけんといと恐れ多し。御身の嘆きに思し較べさせ給ひては土地こそ異なれ、同じ鳥國にさすらはせ給ふ御父御父隱岐の院、御兄御兄阿波の院の御身の上を思し出でて、日夜御袖を絞らせ給ふ。涙に明け涙に暮るゝ十一年、御兄の院は阿波にて崩れさせ給ひ、憂を送り、憂を迎ふること又八年、御父の院亦隱岐にて崩れさせ給ふ。三鳳三所に分れ飛びて、今や一鳳のみぞ残れる、新院の御心の中や如何ならん。

君もげにこれぞ限りの形見とは

知らでや千代の跡を籠めけむ

御涙千行萬行留め敢へさせ給はず、それより鬱々として垂

籠めさせ給ひ、時折は御筆を執らせて、

昇りにし春の霞をしたふとて

そむる衣のいろもはかなし

同じ世のわかれば猶ぞ忍ばるゝ

空行く月のよそのかたみに

など書附け給ひける。斯くて隱岐の院の御骨を京に送りて、大原の奥に藏め奉りたるよし聞し召して斯くなん、

入る月のおぼろの清水如何にして

つひに澄むべき影を留むらむ

春の夜の短き夢を聞きしかど

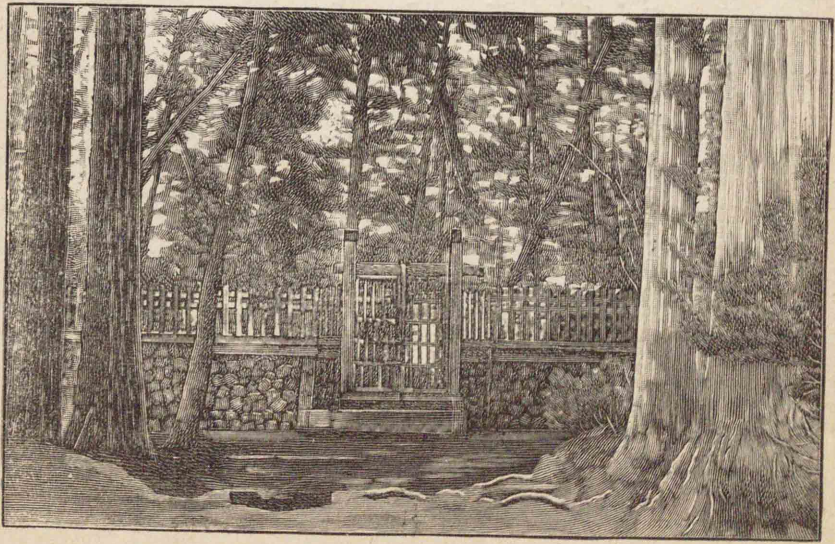
長き思ひの覺むるともなし



仁治三年  
四條天皇崩御  
の年、本文に  
後嵯峨天皇御  
位に即かせ給  
ふとあるは、  
踐祚し給ひし  
を云ふ。(二七  
三)

仁治三年三月、後嵯峨天皇  
御位に即かせ給ふ。世の  
中斯く改まりぬれば、京へ  
還らせ給ふこともやと思  
しけるに、夏も暮れ秋も半  
ばとなれども、何の便とて  
もあらねば、いとど世を心  
細う思して、終に御惱の床  
にと就かせ給ふ。日數經  
るまゝ次第に重り行かせ  
給ひ、當國にても京にても

眞野の御陵



寛元元年  
後嵯峨天皇即  
位の年(九〇三)

水無瀬宮  
攝津三島郡島  
本村大字廣瀬  
に在り。官幣  
中社。

佛事をな營みそ。御骨入浴の後にこそ執り行ふべけれ」と  
御遺誠あらせて、此の年九月十三日、終に崩れさせ給ふ。御年  
四十六にぞましくける。十藏人權頭清範御亡骸を茶毘の  
煙となし奉り、御灰を集めて眞野の淨地に葬り奉り、御骨を  
護りて明くる寛元元年五月十三日、大原の法華堂に納め奉  
る。清範年經て里人の御舊跡を疑はんことを虞れ、尊像を  
刻み奉りて、眞野宮に崇めけるを、明治中興の七年三月、還行  
の御儀式を具へて攝津の水無瀬宮へぞ遷し奉られける。  
承久の昔を思ふ毎に、誰かは悲憤の涙濺がざらん。實に  
實に憎きは逆臣北條にこそあれ、百(日本史略)...

高山



Socrates

北天竺  
ヒマラヤ山の  
南麓、ガンヂ  
ス河の上流一  
帯の地。

一一 世界の四聖 その一 高山林次郎

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる、聖人に  
あらずんば、誰かこれを能くせむ。釋迦・孔子・ソクラテス・基  
督の四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。  
釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に  
生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名を悉達多とい  
ふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道  
後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に  
思を人生の問題に潜め、二十九の歳、その妻子を捨てて城を  
逃れ、山林に隠れ、道を修むる事六年、終に人生の奥義を極め、  
無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地

に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿  
しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋  
迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒に思索の  
高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談  
理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その  
流派を樹てて相争ふ所は畢竟名目の優劣のみ。未だ一世  
の元元をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦こ  
の間に生れ、その廣大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一  
世の木鐸となり、衆民をしてその歸依するところを知らし  
めたり。  
孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百



餘年の昔支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら弟子を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに舉り、内外その風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ定公をして孔子を用ひざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は所謂春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕆然として地を拂へり。或は臣にして、その君を弑するものあり、子にしてその親を害するものあり。強は弱を呑み、大は小を併せ、權力の外に道義ある

齊侯  
景公

なし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻さんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くるものなし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るもの無きか」と。門弟子貢慰めて曰く、「何ぞ夫子を知るもの無からんや。」孔子答へて曰く、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。吾を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずん



ば、吾何を以てか後世に見えん」と。後幾くもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテスは希臘の雅典府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ西暦紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留まり、道德は空文の上のみ貴ばれたり。その狀猶釋迦當時の印度の如く、人生社會の實際に關して殆ど裨益する所無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救済を以て自ら任じ、盛に道を講じ、理を談じ、諄々として倦

まず、詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻撃して、一步も假借せず。侃諤の正義はその稀代の雄辯と相伴なひて、一世を風靡せり。

然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に洩れず、羣小のソクラテスに快からざるもの相計りて、國法に背ける者としてソクラテスを讒訴せり。その訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を勸め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスが此の讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々、百世の眞理ならざるは無し。然れども判官はソクラテスを以て傲慢不遜なり



Asclepias

となして、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く、「命のみ」と。その獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勤むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれむのみ。死又何爲るものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾一雞を以てアスクレピアスの神に捧げよ」と。蓋し會病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしが爲ならん。希臘の聖人ソクラテスはかくの如くにして逝きぬ。年七十。

基督は本名耶蘇といふ。基督とは「膏灌がれたる者」といふ

Yohannes    Bethlehem  
Joseph  
Maria

義にして、教徒の奉れる尊稱なり。猶太のベツレヘムに生る。その生後四年を以て、西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずしてその福音を傳へたり。抑、當時は羅馬帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐に至りて、天下寧日無し。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒に珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於て一世の人心は悉く、



偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せむことを渴望せり。基督この間に生れ自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばずもつて猥に新法・異説を唱へて民を迷はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫めこの事あらんを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、かれ等を許せ。かれ等は、その爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みて曰く、「エルサレムの女子よ、吾が爲に哭くこと勿れ。唯おのれとおのれの子との爲に哭け。」と。かくの如くして基督は三十三年の短命を

Jerusalem

以て十字架上の露と消去りぬ。基督の死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。基督教即ちこれなり。

### 一三 世界の四聖 その二

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。四聖の中、釋迦を除きては、何れも轆軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく咏歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とは何れも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。



慘澹たりと謂ふべし。然れどもこれ等の人の志す所は天下後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは毫もその顧慮する所にあらず。故にその死に就くや晏然として猶歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、卻つて「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて、揚言して曰く、「正義を信ずるものにとりて、死はた何爲るものぞ。われをして一日の生あらしめんか、その一日即ち國民の迷をさまさざるべからず」と。基督は己を罪に陥るゝものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の廣大にして無邊なる。

四聖はその生れたる處と時とを異にす。故にその教理にも亦多少の差異無きを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始りて苦に終る。生老病死、孰れか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り。情慾の原因は、我の一念に執著するに在り。故に吾人は、我の一念を脱卻して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃即ちこれなり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるに在り。而し



て身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、これに本づく。人は生れながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを完うすること能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既に教育を受けて身すでに修らば、家おのづから齊ふべく、家齊はば國おのづから治るべく、國をさまらば天下おのづから太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。思へらく、真正の知識は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。

知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識・道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となせば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども富貴は道德の中に在り」と。

基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を挙げん。曰く、「心の貧しきものは福なるかな。天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな。その人は慰めらる

山上の垂訓  
新約全書馬太  
傳第五・第六  
第七章。



べければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな。その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな。その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな。その人は神を見るべければなり。惡に敵すこと勿れ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉じてこれに向けよ。汝の鄰人を慈みて、汝の敵を愛せよ。人に見せん爲に義をその前に行ふこと勿れ。右の手に爲す所を左の手に知らしむること勿れ。偽善者の行に倣ふこと勿れ。隠れたるを鑑み給ふ神は顯アラに報いたまふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目

ある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る門はその路大きく、これに入るものは多し。嗟、吁、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、それを得るもの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如し」と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑



りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺徳の高大なる事それ何を以てかこれに比せんや。(樗牛全集)

一四 月前納涼

本居 宣長

水無月の廿日のほど、大方も此の頃は、暑さ所せき程なるを、まいて朝より塵許りも曇なく照りはたゞく日影の、西日になる程よに堪へ難くて、思ふどち打ちとけたる物語をだにして、紛らさばやと思ひて、睦まじく相語らふ友達の許に物しつ。無き程にやあらむと、覺束なく思ひしもしるく、けふは物へなむ罷りぬる。といふに、いと口惜しくて、歸りなむと

する程、此の主歸り來て、まづ見るより、今日の暑さを返す返す言ひ續け、汗押し拭ひ、扇打ならしつゝ、伴なひいる。

南面なるところ、伊豫簾かけわたし、あたりゝいとさはらかにしつらひたる、いと涼しげなるに、夕風まちとるべき端つ方に、ついゐたるに、かつゝ暑さも忘るゝこゝちして、簀子のはしに出で、見いだせば、庭の梢ども、いづれとなく茂りあひたる物から、本だちうとましからぬほどに、つくろひなして、このもかのもに、はかなきしば垣なつかしく結ひわたしなど、しめやかに見所あるさまなり。夕つけゆくほど、軒近き吳竹の下風、心もとなきほどに、うちそよめきたるも、飽かぬ心地のみぞせらるゝ。



稍ありて、同じ心なる人、また二人三人なむ來あひたる。さうざうしかりつるに、いとうれしくて、はかなき物語も、今一際心ゆくこゝちす。心隔てぬどちの圓居は、なべて打解けたるなむよきを、況して斯くあつきには、争でか畏りも置き敢へ侍らむ。無禮の罪は宥されなむとて、ほどく帯なども解き散らしぬべし。主なさけある人にて、庭の立石などに、水注がせたる、夕立の名残覺えて、木々の下枝うちなびきて、落つる雫も、言ひ知らず涼しく見ゆ。やうく内外暗くなり行くに、さゝやかなる童の出來て、燈火近くともせば、いでやけぢかくていとあつかはし。今宵は燈籠にてをありなむ。此の火けちてよ。といふ。げにさも侍あむ。とて、たち

ていぬるほどもなく、前栽の茂みにたてるに、火いれたる、ほのかなる影に、青葉の露きら〜と見えて、同じく吹く風も殊に涼しくぞ覺ゆる。夏の月なき程は、庭の光なき、いとむづかしく覺束なきものなるに、此の光なからましかば、いと物のはえなからましをとて、みな人愛であへるに、主のしたり顔なるも、ことわりなりかし、

かくて宵過ぐる程、こ高き松にほのめく影は、月出でたるならむとて、東のつま戸押開きてまつほど、とばかり有りて、いと華やかにさし出でたるは、又似るものなく、涼しく面白きには、燈籠の光も今ぞ無徳にけたれにたる。風さへいと冷かに打吹きたるは、古川のべの杉の下陰ならねども、秋やか

古川のべの  
云云  
涼しきは秋や  
かへりてはつ  
せ川古川のべ  
の杉の下陰  
(新古今和歌  
集、藤原有家)



へりてなど、うち誦しのゝしる。大かた月は、秋をこそめでたき時に、古よりいひおきたれど、此の頃の空に、斯くて待ち出でたるほどよ、たとしへなく心も澄みて、物むづかしさも、こよなく紛るゝわざになむ。(文苑露玉)

一五 頼山陽\* その一 朝日 奈知泉

徳川氏の季年は、それ猶歐洲第十七世紀の末葉の如きか。彼に在りては、文學再興して、古文辭その盛行の極に達したれども、近世國語の文辭は猶幼稚なるを免れず。我に在りては、戰國の餘習已に脱して、文教は靡然として海隅に遍く、漢土の儒學・詞藝その秀を鍾め、その華を競ひたれども、わが

頼山陽  
名は襄。  
安藝の人。

Goethe  
Schiller  
Lessing  
Corneille  
Molière  
Racine  
Chaucer  
Spenser  
Milton  
Shakespeare

近世文學は纔かに萌芽を發したるのみ。若しこの時に方り、一世の偉才を生じて以て我が文學を振ふ者あらんか、その風動は全國に影響して、感化は到る處に行はれ、或は獎勵せられ、或は誘導せられ、或は挑發せられて、才俊の士は彬々として輩出し、以て文藝の圃に遊ぶべく、我が文學の黄金時代は必ず三四十年前に來りしならん。つらく、各國文運の振興を考ふるに、その先を作すものは大抵詩人ならざるはなく、その衰を振ふもの亦詩人ならざるはなし。チ\*ョーサー・ス・ペンサー・ミルトン・シ\*ェクスピアの英文學に於ける、コ\*ルネーユ・モ\*リエール・ラ\*シーヌの佛文學に於ける、ゲ\*ーテ・シルレル・レ\*ッシングの獨逸文學に於ける、ダン



Dante  
Petrarcha

眞淵

賀茂氏

景樹

香川氏

近松

門左衛門

竹田

出雲掾

テ・ペト<sup>\*</sup>ラルカの伊太利文學に於ける、皆然らざるはなし。  
乃ちわが文學を振へる張本も亦詩人に求めざるべからず。  
余は古體詩家に於て眞淵<sup>\*</sup>・景樹<sup>\*</sup>二翁を得、近體詩家に於て近<sup>\*</sup>  
松<sup>\*</sup>・竹田<sup>\*</sup>二叟を得たれども、出づるに或はその時を得ず、學或  
はその道に適せず、才或はその志に合はず、これを以てその  
勢力の及ぶところ限極せられて、未だ文學の全般に向つて、  
その積衰を振ふこと能はざりしを見る。余はかの諸家の  
外に於て、その才學よく權度を得て恰當の時世に遭遇しな  
がら、稀世の偉才を抱いてその用處を誤りたるが爲に、日本  
文學の泰斗たる名譽を得そこなひ、徒に史家なり、策家なり  
文家なり、詩家なりといはれたるのみにて、冠するに絶世絶

代の文豪を以てせらるゝに至らず、萬能達して一心足らず。  
といふが如き嘲をも受くるに至りたる一人物を發見し、未  
だ曾てその人とその才とを痛惜せずんばあらず。余は今  
日、世人が猶その人を崇拜するを見て、聊か自ら慰むる所な  
きにしもあらずといへども、退いてこれを再考すれば、更に  
深く惜しむ所なかるべからず。その人を誰とかする。山  
陽賴氏はなり。

「詩は別才なり。」といひ、「詩人は生る、成るにあらず。」といふは、東  
西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格と  
いひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざる  
なし。その童歳に當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは



詩なり。その父母を懐ふに厚く、その王室を懐ふに厚く、その忠臣・義士を懐ふに厚く、天下・國家を懐ふに厚く、情の熱するところ常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船、行李卸さゞるところなく、春花秋月遊辰遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格言行、誰かこれを詩にあらずといはん。



山陽 賴

試みにその著作の史篇を視よ。政記の一書は固より多とするに足らず。外史何の取る所ぞ。その議論は平凡のみ、その事實は謬誤のみ、その體裁は偏失のみ。然れどもその筆墨の靈妙活動、殆ど天馬空を行く趣あり。敘事或は精、或は疎、或は長、或は短。精にして長なる時は、微として穿たざるなく、細として及ばざるなし。疎にして短なる時は、或は脈々の餘情を含み、或は嫻々の餘韻を存す。争戦を敘すれば、讀者をして汗を握らしめ、別離を敘すれば、讀者をして涙に咽ばしむ。而してその敘論の如き、俯仰低回、感慨淋漓、誠に讀者をして一唱三歎せしむるものあり。是等の文字、是等の思想、果して如何なる天才より流出したるものぞ。そ



の題目を擇ぶに源平以後の争戦記を採りたるが如き、その事實に於ては、博引旁搜と明證確説とを主として、猶讀者を了悟せしむるを務めず、専らその文章の靈動して讀者をして感激せしめんとしたるが如き、特に王室と忠臣とを思ふ情の切なるより、正記を立つる標準一定ならずして、その體裁の前後の矛盾を來せるを顧みざりしが如き、半生の精力を費して編述したる二十二卷の外史は、看來れば一篇無韻の敘事詩たるのみ。

試みにその論策文章を視よ。民政といひ、市糶といひ、水利といひ、邊防といひ、迂疎空濶にして、實用に施すべからざるもの比々として皆是なれども、その熱情の溢れたる、その文勢の壯なる、頗る少年の大聲放語するに似たるものあり。

而して外史以前の文章に就きてその精華を求むるに、その寸鐵人を殺すの妙、多くは小品の文字にあり。その形體は即ち論策たり、文章たり、その本質は即ち想像のみ、詩詞のみ、去りてその詩を見よ。雄健なるものあり、典雅なるものあり、適麗なるものあり、輕妙なるものあり。而してその最長を見るは歌行にあり、樂府にあり、料を史傳にとりてこれを詩詞に寓したるものにより。山陽亦自ら以て得意とし、余不欲詠物。詠物不若詠史。史中有無數好題目。隨讀淺深皆可成真詩。舍之而曰雁字鶯梭無爲也。とはその平常の持論なりき。亦以てその才の日本の文學を振ふに足りしを



戯に作れる  
今様  
花よりあくる  
み吉野の、  
春の曙見渡  
さば、もろこ  
し人も高麗人  
も、大和心に  
なりぬべし。

李北地  
名は夢陽。明  
の詩人。  
嚴海珊  
清の詩人。

見るべきなり。余嘗てその戯に作れる今様を読み、その跌宕飄逸自ら不群の趣あるに服し、思へらく、この詩才に加ふるに彼の史傳の嗜好あり、もし馳驟縱横、奇想を天外に飛ばし、その事實に拘泥することなく演義述作する所あらしめば、その造詣何ぞ唯李北地、嚴海珊にして止まんや。わが史傳は未だ多く題詠に入らず、潜心好案を求め、研精妙句を探り、その外史に灑ぎたる心血を傾倒してこれを詩賦に注がんか、儼然たる敘事詩を作りて、わが文學世界を風靡せんこと難からざりしならん。惜しいかな、漢土の詩に僻して固有の天才を萎縮し、經濟の學に志を奪はれて専ら精力を詩に用ひざりしこと。

一六 賴山陽 その二

余が山陽の専ら詩人とならざりしを惜しむ理由頗る多し。今且くこれを擧げんか。詩は別才なり。而して詩才敏妙、その天稟に出づ。これ一なり。詩人は料を取るに自ら新機軸を求むべし。而して史傳を以て料とすることその卓識に發す。これ二なり。詩人は愛情の熱肺腸なかるべからず。而して尊王の誠と忠臣義士を思ふ情とは、面に盎れて脊に狹し。これ三なり。而して余が特に表彰せざるべからざる第四の理由あり。余曾て江木鰐水の作りたる山陽先生行狀を読み、その「常曰

江木鰐水  
名は磯。  
安藝の人。  
山陽の門人。



「謂我才子、未悉我者也、謂我能刻苦者、眞知我矣。」といふに至り、竊かにその實を失へるにあらざるかを訝りしが、後かの前兵兒謠竝に蒙古來の原稿を觀るに及び、その苦心經營一

雲和山邦吳於越水天驚神青一髮萬  
里河舟天草洋煙橫蓬室の漸  
注督見  
大魚波會延太向船似月

西遊上卷心書、  
山内祥、正公、時已丑九月、未定、十二年、  
一書、  
續

山陽筆蹟

古賀穀堂  
名は燕、  
佐賀藩の儒  
者。

句も苟もせざりし實迹を審にし、且その古賀穀堂を訪ひ、初め、その千言立ちどころに成る敏才に驚きしが、數月を隔てて再び訪ひたる時、その文稿の依然として改刪する所なか

りしを見て、茲に與し易きのみ念を起したりといふ逸事を聞き、その意匠慘澹、勉勵刻畫の勞を厭はざる忍耐あるを明認し、坐ろに景慕の情を催したり。蓋し創意の才は、必ず刻畫の力と相待ちて後始めて絢爛の華彩を發すべし。余が山陽を惜しむ第四の理由とするは、即ち斯の經營刻畫の魂氣のみ。

又山陽が當時の儒者の如くに、經義に耽り章句訓詁の末を爭ふ風なかりしは、頗るその才の發達に便なりしなるべしと雖も、かの經濟實用を以て學問の唯一本旨なりと考ふるに至りては、山陽亦その常套を襲ふを免れず。つらく山陽の才幹を窺ふに、政治吏務はその長ずる所にあらざりし



が如し。則ち早く自ら計をなし、區々たる論策を作るを輟め、大いに詩に奮はゞ、その成功何ぞ唯今日の名聲に止るのみならんや。人或は謂はん、山陽は外史を著して一世を鼓舞し、大いに尊王の氣象を喚び起して、遂に維新中興の遠因をなせり。若し外史を作らざる一詩人にて止まんか、何ぞ斯の大功を奏するを得ん」と。嗚呼、これ詩を知らざるもの言のみ。詩の人心を感發するは、その勢力遙かに散文に過ぐ。外史果して能く維新中興の遠因をなせりといはゞ、外史中の事實を敷衍してこれを詩にせるもの、亦豈その遠因となる能はざらんや。且外史の如きは、その文章如何に靈妙なりとも、今日の史學よりこれを視れば、小説と實録と

の間に横たはる一種の不可思議物たり。史の名目を以てしては、決して完璧なりといふ能はず、上乘なりといふ能はず、焉んぞ始めより純然たる詩篇たるの愈れるに若かんや。柴野博士は山陽童時の詩を見て大いに嘆賞し、實材たらしむべし、詞人たらしむべからず」とて、山陽の父春水に勸めて史を學ばしめたりといへり。博士の見、亦時流を脱せずといへども、その史を學ばしめたるは大いに可なり。その遂に修史の業に志すに至らしめたるは、余輩が山陽のために再四歎惜する所なり。(今世名家文鈔)

一七 平野國臣の歌



高山仲繩  
名は彦九郎。  
上野の人。寛  
政の三奇士の  
一人。

高山仲繩夙に勤王の志を抱き、身を草莽より挺して京洛に詣り、匪躬の節を效すあり。事天關に聞ゆるや、仲繩狂喜して、

我を我としろしめすかや皇の

玉の御聲のかゝるうれしさ

と歌へり。仲繩當時の情懷、言表に生動し、今猶目睹するの感あるにあらずや。又その西の方九州を遊説し、將に薩摩に入らんとして、關吏のために拒まるゝや、

薩摩人如何にや如何に刈萱の

關も鎖さぬ御代と知らずや

と喝破せり。請ふ徐にこの歌を誦せよ。神の如き巨人巨

刈萱の關  
筑前國筑紫郡  
水城村の南に  
その舊址あり。

眞木保臣  
和泉と稱す、  
筑後の人。  
平野國臣  
福岡藩士。

手百二の都城を撼搖し、薩人の長眠を覺醒せしめんとするの感起らずや。

更に九重の上を仰げば、時の帝、孝明天皇歌ひて宣はく、

矛とりて衛れ宮人九重の

御階の櫻風そよぐなり

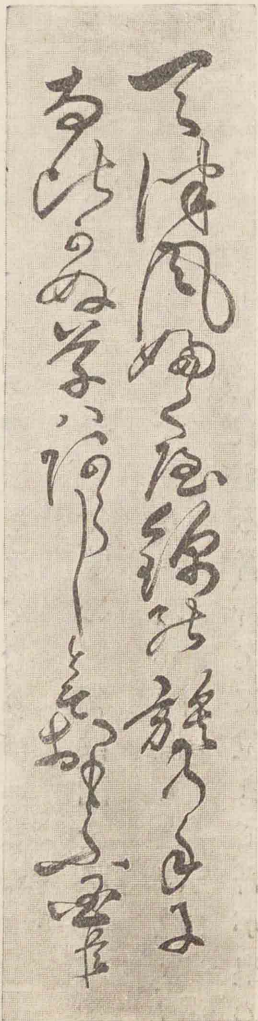
と。御製の一たび傳はるや、その影響は、詔を降して勤王の兵を徵したまふより大なり。西郷隆盛も之に泣き、眞木保臣も之に泣き、凡そ血誠ある者、皆之に泣きて、吾が皇の懐に敵せんと思はざるはあらず。平野國臣の如き、一身を君國に捧ぐるの士は、之を拜して益、堅確を加へしといふ。國臣の歌、また血誠に出でざるはなし。其の大策を懷きて



さくらじま  
山  
櫻島嶽。薩摩  
國鹿兒島郡に  
在り。

薩摩に赴き策の納れられざるを憤慨するや、罵りて曰く、  
我が胃の燃ゆる思にくらぶれば

煙はうすししさくら<sup>\*</sup>らじま山



平野國臣筆蹟

火山の噴火も之に比すれば遜色あり、その氣虹の如しといふも猶之を狀するに足らじ。而して自家勤王の志を述べては、

數ならぬ身にはあれども願はくは

錦の旗のもとに死にてむ

といひ、其の胷中の磊塊を寫しては、

湧き出づる心の底は淺くとも

岩間の清水汲む人もがな

と歌ひ、若しそれ皇室の式微を嘆じては、

山ざくら見るにつけても大内の

花をしぞ思ふ春雨のそら

大内の山邊の霞吹き拂ひ

花ににほはむ春風もがな

春秋の行幸も絶えて徒に

にほふ都の花もみぢかな



といひ、大政の復古を希ひては、

青雲のむかぶす極み皇の

御稜威かがやく御代となしてむ

玉敷の平の宮路絶間なく

貢の車運ぶ代もがな

といふ。希望に次ぐに義舉を以てし、手に天日を捧げ、虞淵の底より回さんとしては、

今しばし待てや都の花紅葉

行幸ある世となさでやむべき

と歌ひ、車駕將に宮闕を發し、大和・伊勢に幸せさせ給はんとするの敕を拜しては、

虞淵云々  
日出<sup>二</sup>暘谷<sup>一</sup>、  
入<sup>二</sup>于虞淵<sup>一</sup>。  
(淮南子)  
魯陽公與<sup>レ</sup>韓  
戰。日暮。援<sup>レ</sup>  
戈搗<sup>レ</sup>之。日反  
三舍。(淮南子)

皇路正意云

皇路當<sup>二</sup>清夷<sup>一</sup>  
含<sup>レ</sup>和吐<sup>二</sup>明<sup>一</sup>  
延。時窳節乃  
見、一々垂<sup>二</sup>丹<sup>一</sup>  
青。(正氣歌、  
文天祥)  
赤松子  
支那神農氏の  
時の仙人。  
光風霽月  
周茂叔、人品  
甚高。曾中酒  
落、如<sup>二</sup>光風霽  
月<sup>一</sup>。(書言故  
事)

さゝらがた錦の御旗靡けやと

わが待つことも久しかりけり

と絶叫せり。劍を執りて中夜に舞ひ、馬を躍らして前路を

披かんとするの意氣神彩、目睫の間に依稀たらずや。國士

勤王の壯志やそれかくの如きなり。然れどもこれ所謂時

艱して節乃ち見れたるのみ。皇路正夷に當らんか、必ずし

も和を含みて明廷に吐かんとも競はざるべく、寧ろ赤松子

に従ひて煙霞の間に優遊するの士ならんか。

君が代の安けかりなば、かねてより

身は花守となりけむものを

誦し來れば、心頭光風霽月の如きものあるを覺ゆ。英雄頭



英雄首を回  
らせば云々

半窓春水一蓑  
煙、抱二月懷  
中一枕斗眠  
説二與時人  
休一問我、英  
雄回首即神  
仙、黄金谷聯  
珠詩格

Faust

を回らせば即ち神仙、古人實に我を欺かざるなり。

(日南集に據る)

一八 ファウストの絶望 谷崎 精二

博士<sup>\*</sup>ファウストは書齋の椅子に腰かけながら、様々に思ひ煩つた。

彼は哲學も、法學も、醫學も、神學も悉く熱心に研究して其の蘊奥を極めたが、依然として自分はつまらぬ人間の様にか思へなかつた。勿論世の鈍物に比べてみれば、彼は伶俐には相違なかつた。疑惑に悩まされる事もなく、地獄も悪魔も恐くはなかつたが、その代りに一切の喜がなくなつて

しまつた。一體此の世界を一つに統べて居る者は何であらう。其處に働いて居る一切の力の源は何であらう。それさへ解つたらもう何もやくざな辯舌を弄しなくても済むのである。……ふと窓から大空を見上げると、満月が煌々と照互つてゐる。此の机の傍で眠らずに幾夜かを過した時、月は何時にかうして書物や紙の上に照つて居たのであつた。あゝ、あの愛らしい光の下で、精靈の様に高い山の上を、びよいゝ飛びあるく事が出来たら如何であらう、空しき智識の塵から拔出でて、廣野の中で月の影を浴びて住む事が出来たらどうであらう。さう思ふにつけ、ファウストは、此の石の穴の様な書齋の有様が咀はしかつた。美しい



月の光も此處へは濁つて落ちて来る。室の中には蠹魚が附き、塵に蔽はれた書が天井までも積上げてある。様々の器械や家具が所狭きまでに詰込んである。神は人間を生きた自然の中へ送り込んだのに、何故かうして煙と腐敗したものの中で、人や禽獸の骸骨に取巻かれて居ねばならぬのだらう。

萬卷の書籍も雑多の骨董も、思へば唯塵芥に過ぎない。其の中に何の眞に求むべきものがあらう。何時の世、何處の國でも人間が皆苦しみぬいて、幸福な者は極稀にしかかなかつたと云ふ事を書籍の中で學んで何にならう。あれ、あの壁に懸つてゐる標本の髑髏の主も、嘗ては自分と同じやう

に迷ひつゝ、薄明の中に眞理を追求めて、遂に一生を失敗に終つた人に違ない。そこら中に並んだ、或は車輪の様な或は櫛の齒の様な、様々の學術上の器械も、神祕な自然の扉を開ける鍵とするに足らないではないか。絶望の果いろくと思ひ耽りながら、ふとファウストは魔睡藥を盛つた瓶に目をつけた。人を殺す恐ろしい力を持つた其の靈液の事を考へると、心は忽ち夜の森を歩く時月がさし出た様に明るく晴々しくなつた。さうだ、これを一滴飲めば苦痛は和らぐのだ。新なる日が新なる岸へ我が身を呼ぶのだ。さう思ひながら、彼は瓶から杯へ靈液をあけて口許へ持つて行くと、丁度其の時遙か遠くから鐘の音



に交つて「キリストは蘇り給へり」と云ふ復活祭の歌が聞えて來た。其の清い神々しい音色は、強く彼の胸を打つて「アウストは思はず杯を口から放した。彼にはもう信仰がなかつた。天の使命を説いても、彼は神も奇蹟も信ずる事が出來なかつた。けれども子供の頃から聞きなれてゐた其の歌は、甘い追憶の中心に、今一度彼に純な子供の様な感情を起させたのだ。今一度彼を現世の生活に呼戻したのだ。彼は黙つて歌聲に耳を傾けた。子供の時分其の歌を聞きながら不思議な惠深いあこがれの念に驅られて、森の中野の邊と歩き廻つた事などを思ひ出すと、彼の眼には熱い涙さへ湧いて出た。(ゲーテ物語)

一九 ワイマールより

藤代 禎 輔

ワイマールは小さな都にて、山水の景勝に富めるにも無之候へども、如何にも閑靜にて人氣良く、誠に居心地よき所に候。公園には森の繁つて居る中をイルムと云ふ瀧の川位の流がちよろ／＼致し居り、其の上には鐵の欄干に石柱と云ふ嚴しきものも有れど、又丸太を組合せて架けた風流の橋もありて、シルレルの腰掛とかゲーテの休息小屋とか何れも昔通り保存して、古を偲ばしむる跡は到る處に散在致し、一々委しく點檢して、詩作との關係など取調べ候はゞ、餘程興味ある事ならんが、短日月の滞在にては夫も出來兼候。

Schiller Ilm Weimar



Karl August



通り一遍の旅客として、目に觸れ候處を御報告申上候。今日第一番に足を運びたるは圖書館にて、案内者の言葉によれば、カール・アウグスト太公が露國の大賓某に對ひてワグネル第一の名物と紹介せる所なりとか。初めはゲイテが我が書齋に珍書奇籍も夥しきことなるが、ゲイテ・シルレル始め其の他有名なる人物の彫像

Trippel  
Apollo  
Dannecker

肖像畫など、貴重品の數々ありて、今まで文學史の挿畫にて纔かに其の倂を偲びたる名作の實物に接し、トリツペルが靈腕に彫まれたる、アポロ其の儘との評あるゲイテが大石像、ダンネツケルが妙技を揮ひしシルレルの半身像など、凝然見惚れて案内者に急ぎ立てられ、不承不承歩を移すと云ふ始末、儘になるなら何時までも此の地に居て、朝夕此等の逸品を眺めたれとの念も起り候。圖書館を出でてシルレルの住宅を音信れ候。表からの見付きはとても立派と云ふ建物には無之候へども、窓の板戸が綠色に塗立てある様など何となくゆかしき心地せられ中に這入りて一階二階は梯子段を見し許り、三階に至りて



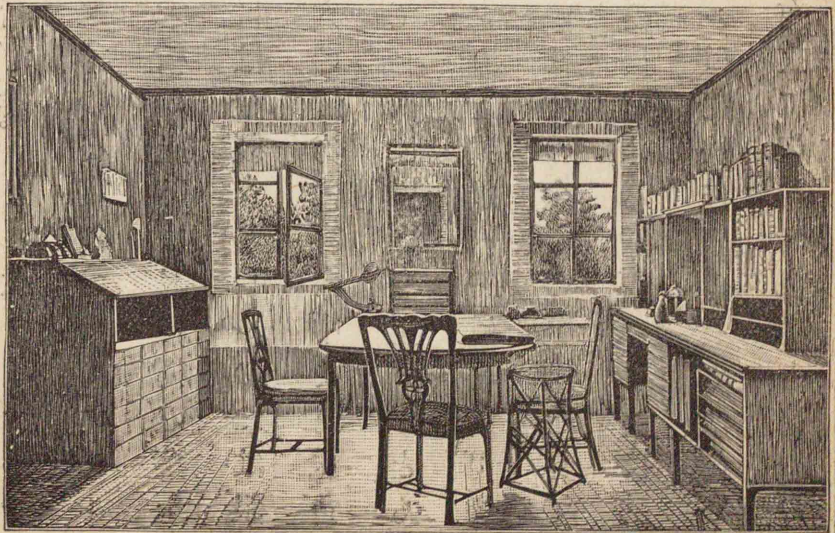
シルレルが應接室・書齋・臨終室を一覽致候。一切の裝飾品を取除けて、詩聖が使ひ慣れし文房具・椅子・寢臺・掛額等を据附けあるばかりなれば、至つて質素のものに候へども、此の内に寢食して晩年の傑作を産み出せし現場と思へば、感慨限りなき次第、腐れ林檎の香を嗅ぎて、深更まで意匠を凝したるは此の机の前にやあらん。鼻煙草に睡魔を驅りて、神來の筆を驅せたるは、此の窓下ならんなど、詩人ならぬ我も空想の天地に身を置きて、案内者の饒舌も耳に入らばこそ、臨終室を見るに及びて、其の餘りに狹隘なるに驚き、かゝる偉人が此のむさくろしき部屋にて息を引取りたるかと、坐る暗涙に咽び候。

此處を立出で、國君の墳墓に詣で候。これはワイマール時代の君主が遺骸を納むる圓天井の石室にて、ゲイテ・シルレルの棺も此の裡に安置有之、木棺の上部は月桂樹の葉を以て堆く蔽はれ、ゲイテの頭部には金製、シルレルのには銀製の月桂冠を供へたり。兩詩人の優劣は存命中より兎角議論ありて、ゲイテ自身も、強ひて一人に團扇を上げずとも、これ程の詩人を二人まで出したりと獨逸國民は喜ぶ可き筈なるを」と云ひたる位なるが、いま此の金銀の差別を見て、勿論兩詩人の地位若しくは其の長逝せる當事の事情に依ることは承知しながら、シルレルは死後に至るまで薄倅なりとの感を起し候。併し身を布衣に起して、王者と同一の石



館内に遺屍を納めらるゝは比類なき名譽と感嘆の餘り、兩詩聖の棺上月桂樹の葉を數葉摘取り、記念にとて持歸り候。これよりゲーテの住宅に赴きしが、流石宰相の地位にありて、當代に時めきし詩人の事とて、シルレルの居宅などとは比較にならぬ程廣大なるものなれど、

ゲテの住宅



ゲテの住宅

Jena  
Wurzburg

現今の程度より云へば、極めて質樸にて、是將案外の感に打たれ候。ゲーテの寢室に入りて、シルレルが臨終の際、ゲテも病蓐に就き居りしかば、家人はシルレルの死を告げなば、病氣に障りなんと秘しけれど、素振りに悟りて、其の實を察し、潸然流涕したりとの一事をおもひうかぶれば、兩詩聖の交情は東西古今に例なき美事なりと感涙禁め難かりき。庭園に面せる一室に、シルレルの頭蓋骨を手にせるゲテの半身像を見、ゲーテが此の彫刻に現れたる想をうたひたる詩を思ひ出でて、感一層深かりき。ワイマールも一通り相濟みたれば、明日此の地を發足致し、イエナを経てウルツブルグに赴くつもり、行く先々の模様はおひく御通



知可申上候、(帝國文學)

二〇 萬葉時代の歌人 その一 新保磐次

柿本人麻呂は石見國に生れたりとも、又大和國に生れたりともいふ。持統の朝に草壁皇子の舍人となり、皇子薨去の後朝廷の小官に任ぜられ、其の後高市皇子に仕へしが、皇子亦薨じ給ふ。文武の朝に石見の國に赴任して、元明の和銅年中彼の國にて卒しぬといひ、或は此の朝の神龜又は天平年中に卒しぬともいふ。其の間紀伊・伊勢・吉野等の遊幸に供奉し、或は諸皇子に従ひて名勝を探り、或は近江・石見・筑紫の諸國に遊びて、過ぐる所歌あらざるはなし。就中最も人

百人一首云々

足曳の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひりかもねむ(柿本人丸)

口に膾炙する者は百人一首に載する所なること言ふまでもなし。近江の舊都を傷む歌、

さざ波の國つ御神のうらさびて

あれたる都見れば悲しも

又石見より妻に別れて上る時の歌、

石見のや高角山の木の閒ゆも

吾が振る袖を妻見つらんか

死に臨みて自ら傷みて作れる歌、

鴨山の岩根し枕けるわれをかも

知らずと妻が待ちつゝあらむ

皆哀情痛切にして、鬼神を泣かしむべし。



人麻呂特に長歌に長じ古今獨歩と稱せらる。然れども官位は甚だ卑くして、位は六位以下、官は石見掾若しくは目に過ぎざるべしといふ。古今集の序に正三位人麻呂とあるは後世の贈位にやあらん。柿本集に「唐土にありて」と題せる歌あれど、彼が入唐亦其の詳かなるを知り難し。要するに人麻呂は微賤の身を以て、詞藻を雲上に達したる者にして、後世壬生忠峯が長歌の中に、

あはれ古ありきてふ 人麻呂こそは嬉しけれ

身は下ながら言の葉を 天つ空まで聞えあげ

といへるこそ事實なるべけれ。

山邊赤人の傳も詳かに知り難し。神龜・天平の間彼も亦屢

車駕に供奉して紀伊・吉野等に至り、或は自ら東國に遊ぶ。

其の富士の歌は百人一首によりて兒女子にも知らる。彼

が富士の歌數首あり。

富士の嶺を高め畏み天雲も

い往きはばかりたなびくものを

和歌の浦の歌亦世に知らる。

和歌の浦に潮満ち來れば瀉を無み

芦邊をさして鶴啼きわたる

前首は雲を人格化して其の畏敬の狀を詠じ、後首は滿潮の時の鶴の恐慌を敘す。共に巧を假らずして其の妙神に入

富士の歌  
田子の浦に打  
いで見れば  
白妙の富士の  
高嶺に雪はふ  
りつゝ。



人麻呂は長歌に長じ、赤人は短歌に長ず、人麻呂は善く情を抒べ、赤人は善く景を敘す。紀貫之は二人を評して、人麻呂は赤人が上に立たむこと難く、赤人は人麻呂が下に立たむこと難くなむありける」といへり。賀茂眞淵が人麻呂を評したる大意に、其の長歌の勢は風雲に乗じて長空を行く龍の如く、詞は大海に潮の湧くが如し。短歌の詞は勇將の弓弦を鳴らすが如く、深き哀情は千早ぶる神をもなかしむべし」といへり。又赤人を評して曰く、長歌の詞は吉野川の清きが如く、心は富士の嶺の高きが如く、只それ美を盡せり。短歌は巧を爲さずして自然に妙なるは、本心の高尚なるが致す所か。譬へば檳榔毛の車にて大路を渡る貴人の、聲色

を動かさざるが如し」といへり。世に二人を並べ稱して山柿といふ。

二一 萬葉時代の歌人 その二

山柿に亞げる詩人を山上憶良とす。憶良は大寶年中遣唐少録として入唐せし人なれば、其の漢學に秀でしこと知るべし。歌は山柿に遊覽の作多きに反し、是は多く題を人事に取り、君臣父子夫婦の情を詠じ、社會人生の有様を歌へり。嘗て宴席より歸る時、

憶良らは今は罷らむ子泣くらむ

其の彼の母も吾を待つらむぞ



天平二年彼が筑前守たりし時にや、貧窮問答の歌を作りて、  
地方貧民の苦を訴へたり。其の中に

天地は廣しといへど 吾が爲は狭くやなりぬる

日月は明しといへど 吾が爲は照りや給はぬ

\* \* \* \* \*

いとノきて短き物を 端切るといへるが如く

管取る里長が聲は 閨戸まで來立ち呼ばひぬ

かくばかり術なきものか世の中の道

以て官吏誅求の狀を述べたり。嘗て病に臥したる時、

丈夫やも空しかるべき萬代に

語り繼ぐべき名は立たずして

感慨淋漓として懦夫を立たしむるに足れり。眞淵彼が歌  
を評して曰く、「言質朴にして心美し、久米部の武士の武裝し  
て舞ふが如し。」と

この人々を初として、重に奈良朝の歌を集めたるは萬葉集  
なり、仁徳天皇以後の歌を含むと雖も、上代の者は甚だ少し。  
選者は橘諸兄にして、大伴家持が修補せし者なりといひ、異  
説猶多けれど家持の手に成りしものの如し。家持は百人  
一首の中納言家持にして、陸奥より黄金を進献せる時、

すめらぎの御代榮えむと東なる

みちのく山にこがね花さく

と詠ぜし人なり。萬葉集中一二流の歌人にして、最も多く

家持は云々  
百人一首の中  
納言家持、  
「かさぎの  
渡せる橋にお  
く霜の白きを  
見れば夜ぞふ  
けにける。」



武士的の歌を詠ぜり。總じて萬葉の長所は長歌に在り、後世之に及ぶものなし。(趣味の日本史)

二二 五丈原 王 井 晚 翠

魏軍の營も音絶えて  
 起たずと思ふ今の間も  
 病を扶け身をおこし  
 夜半の大空雲もなし  
 刁斗聲無く露落ちて  
 三軍均しく聲呑みて  
 羽扇綸巾はださむみ

夜は靜かなり五丈原  
 丹心國をわすられず  
 臥帳掲げて立出づる  
 旌旗は寒し風きよし  
 つゝしみ迎ふ大軍師  
 面わ寔れし病める身を

五丈原  
今の陝西省鳳翔縣の西南にある地。孔明此の地に魏軍と戦ひ、陣中にて病死せり。

知るや非情の小夜嵐  
 諸壘冷く經めぐりて  
 星斗はひらく天の陣  
 つるぎは光り影冴えて  
 嗚呼陣頭に現はれて  
 祁山の嶺に長驅して  
 王師直ちに北を指し  
 願ひし其も仇なりや  
 帳下三千將足るも  
 成敗つひに天の命  
 舊都再び駕をむかへ

輪車靜かに軋り行く  
 山河は連ぬ地の營所  
 結ぶに似たり夜半の霜  
 敵と又見ん時やいつ  
 心はいさむ風のまへ  
 馬に河洛に飲まさんと  
 胸裏百萬兵はあり  
 彼はた時を如何にせん  
 こと豫めはかられず  
 麟臺永く名をつたふ



南陽 孔明が未だ劉備に仕へざりし昔隠棲せし地。

成都 蜀の都、今の四川省、成都府。

明主 備劉の事。

春玉樓のはなのいろ いさほしなりて南陽に  
 琴書を又も友とせん 望はつひに空しきか  
 君恩酬ゆ身の一死 今更我を惜しまねど  
 今末いかに漢の運 過ぎしを偲び後偲ぶ  
 無限の思無限の情 南成都のそらいづこ  
 玉壘今は秋ふけて 錦江の水瘦せぬべく  
 鐵馬あらしに嘶きて 劍關の雲ねむるべく  
 明主の知遇身に受けて 三顧の恩にゆくりなく  
 立ちも出でてけん舊草廬 嗚呼鳳遂に衰へて  
 今に楚狂の歌もあれ 人生意氣に感じては  
 成否を誰かあげつらふ

成否を誰かあげつらふ 一死盡し、身の誠  
 仰げば銀河影冴えて 無数の星斗光濃し  
 照すやいなや英雄の 苦心孤忠の胸ひとつ  
 其の壯烈に感じては 鬼神も哭かん秋の風  
 (天地有情)

二三 孟子 その一 福本日南

支那の戦國は忽然二千載の上に去りたれども、戦國の形勢は依然二千載の下に連れり。其の秦は露に似たり、其の楚は英に似たり、其の齊は佛に似たり、其の燕は日に似たり、其の魏は獨に似たり、其の趙は伊に似たり、其の韓は壤に似たり、悉く當らずと雖も、形勢は髣髴たり。彼は一大陸を世界



とし、是は五大陸を方輿とするの別あるのみ。朝に合従するもの相同じく、夕べに連衡するもの相同じ。彼に一時的小康あり、是に武裝的平和あり。梁の襄王に非ざるも、嗟乎天下悪くにか定まらん。

楊朱の爲我主義は今の主我主義なり。理はこれあり、然も之を思へば心に害あり。墨翟の兼愛主義は今の汎愛主義なり。意は非ならず、然も之を行はんとすれば、事に害あり。古は楊墨道を塞ぐといふ。今も楊墨道を塞ぎたり。何となれば列國の經世を言ふ者は概ね皆帝國主義に傾けり。是爲我主義の甚だしきものなればなり。天下の人道を談ずる者は、多く皆汎愛主義に赴けり。是兼愛主義の極れる

楊朱

支那周の人、

墨翟より後、

孟子より前に

生る、其の説

自己を愛する

を主とす。

墨翟

支那周の人、

孔子より稍々

後に出づ、其

の説博く他を

愛するを主と

す。

East end

ものなればなり。

人皆我が身家を肥さんと欲して其の他を顧みず。富者益富みて、貧者益貧しく、多數の幸福は則ち褫ぎ去らる。之を倫敦の一府に見よ、其の市底よりは高樓雲の如く起り、大厦霞の如く連り、人寰に天堂を現じたるやの觀あるも、一步をイーストエンド區に移せば百萬の生靈は餓鬼に墮ち、母子を擁して食なきに泣き、夫は婦を撫して衣なきを嘆つ。人類の構成せる個人的社會なるものは、斯くの如く無情なるか。天心豈傷まざらんや。而も是晉倫敦の一府のみならず、東西到る處比々皆然り。誰か之を致したる、即ち主我主義の災なり。國皆我が國家を大にせんと欲して其の他



を顧みず。強國愈強くして、弱國愈弱く、世界の平和は絶えず毀傷せらる。之を東西の列國に視よ。波蘭何の罪かある、芬蘭何の罪かある、印度何の罪かある、印度支那何の罪かある。是近き既往に兼併せられし所の國なり。巴爾罕何の罪かある、土耳其何の罪かある、波斯何の罪かある、支那何の罪かある。是今の現在に逼迫せらるゝ所の國なり。獨り是のみならざるなり。小國といふ小國は皆危急を告げ、弱國といふ弱國は皆亡滅に瀕せざるはあらず。國民の形を成せる國際的社會なるものは斯くの如く殘虐なるか。天心亦豈悲しまざらんや。是此の無道悖天の象誰か之を送りたる。即ち亦主義及び其の子の帝國主義なり。

強國既に弱國を兼ね、大國亦小國を併せて、意未だ飽かざるなり。是に於てか弱小にして國を立つる者は、軍備を是事とするあるのみ。弱小の國民何ぞそれ悲惨なる。然も是弱小の國民のみならざるなり。弱國は強國と疾視し、小國は大國と讎視すれば、強大にして國を建つる者も、亦軍備を事とせざるを得ず。即ち強大の國民も、等しく不幸を免れず。之を歐洲のみに察するも、常備の兵數約三百七十萬人、一兵一年の費額平均千四百四十二法にして、其總費額は五十三億三百萬餘法たり。是全く軍備の爲に直接に糜消する所なり。且此の五十三億三百萬餘法は、單に陸軍の軍備たり。陸海全體の軍備に視れば、一年の費額は總計八十三



億九千五百萬法に上れり。此の他陸海の軍器軍艦の爲に不生産的即ち一去不還的資本の投下せられたるもの、現に三百億法に上れり。加之此の常備軍に列せる兵員三百七十萬人たる、是屈強なる生産的壯丁なり。平均一日六法を生出す可き壯丁たれば、之を兵員たらしむるが爲に、一年三百日間接の損失は、更に六十六億六千萬法に達せり。此に一年を三百日と算するは、六日の勞に視て、一日の逸を省けばなり。

一大陸にして且然り。若しこれに他の五大陸の兵員、軍費及び之が間接の損失を合せ算しなば、其の額舉げて言ふ可からざるものあらん。是故に露帝ニコラス二世は嘗て傳

Nicolas II

檄して曰く、今や列國軍備の爲に日に月に累進する國費の増加は、其の源泉に向ひ、公共の幸福を脅迫するものあり。人民の智力・腕力・生業・資本は天賦自然の實用に反し、其の大部分を舉げて不生産的に滅盡せらるゝものあり。幾億萬の巨費は恐る可き破壊の機械に消費せられ、而も其の機械たる、科學の賜として最新最鋭を稱するも、科學の範圍に更に一新發明あるに會へば、明日は悉く無用の廢物に歸するのみ。國民の耕作經濟の進歩、富の生出等、爲に進善を害せらるゝもの幾何ぞ。これ故に列國の兵力にして益、暢發すれば、其の政府の冀望する目的に益、遠ざかるものこれあるのみ。此のゆゑに日に戦具を聚積し、過度なる軍備を建有す



る列國に於ける經濟の危急は、今日の所謂武裝的平和の名下に、偶、其の人民をして相率ゐて崩壊せんとする危崖の下に赴かしむるのみ。斯くの如き状態をして永く繼存せしめん乎、恐惶は一般人類の思想を衝動し、測る可からざる不幸を將來に來さんとす。」と。君子は人を以て言を廢せずと謂ふ。露帝の言永く思ふ可し。世界の生民を驅りて此の極に至らしめたるもの、一に楊朱の學派に非ずや。即ち主義我主義及び其の子の帝國主義には非ずや。

二四 孟子 子 其二

墨翟の兼愛主義は全く之に異なり。彼は稱すらく、「愛に差

等なし。」と。即ち彼は平等と博愛とを竝進し、實現せんと欲する者なり。是に於て乎汎愛主義を開き來る。意たる非ならず。何となれば是人として希望す可き事體なればなり。然も之を行はんとして事に害あるものは何の故ぞ。彼は平等と博愛との竝び尙ぶ可きを知りて、秩序の并せ重んず可きを遺したればなり。

此に人あり。其の藏する所と其の獲る所の金穀を發し、悉く散じて路人に頒たん乎。路人の十や五や其の惠を惠とするは則ちこれあらん。然も最親の父母即日堂に飢ゑ、最愛の妻兒即夜室に寒えなん。而して路人に益せしもの如何と願れば、眞に滄海の一粟に過ぎず。之を加ふるも路人



を富まさず。之を加へざるも路人を貧しくせず。空しく父母の飢ゑ仆れ、妻兒の凍え死するを睹んのみ。斯くの如きもの即ち汎愛主義の弊なり。帝國主義の主戦論を佩帶し來れるが如く、汎愛主義は非戦論を隨伴し來る。意たる亦非ならず。何となれば戦争の人類社會を荼毒するを惡めばなり。然も之を主とするの事に害あるは何の故ぞ。彼は殺戮の惡む可きを知りて、人權の捍す可きを忘れたればなり。こゝに國あり。其の境を境として、其の民を民とし、天道を樂しみて、幸福を載せん一國あり。之を奪ひて兼併せんと欲し、干戈を動かして來り撃つ。撃たるゝ者おもへらく、戰

孟軻氏  
孟子の事、孟  
は姓、軻は名。

争は罪惡なり、干犯す可からず」と。乃ち相率ゐて國外に遁れんか、無數の窮民塗炭に陥らん。若し又祖國を棄つるに忍びず、首を駢べて敵前に降らんか、自由の國民奴隸とならん。斯くの如きもの即ち亦汎愛主義の弊なり。楊墨は死すれども楊墨の子孫は絶えず。古に在りて道を塞ぎしが如く、今に於ても亦道を塞げり。是生民の大厄には非ずや。戦國の時孟軻氏の出づるあり。楊墨を排きて道廓如たりといふ。道たる廣大、我敢て知れりと謂はんや。然も亦自ら見る所なしとせず。孟軻氏口を開けば仁義禮知といふ。仁なるものは人道なり。義なるものは正義なり。禮なるものは秩序なり。知なるものは知識なり。而



して是を運らすに浩然の氣を以てせり。是體隣たる自由の精神なり。蓋し惟みるに人々自由の精神を振起して、人道を擴充し、正義を崇尚し兼ねて智識を砥礪し、之を出すに秩序を以てするありて、而る後始めて此の社會を優遷し、此の世運を進善するあらんのみ。是孔丘氏の大宗とせし所にして、孟軻氏の紹述せし所なり。一言以て之を蔽はん乎、是秩序的進歩の教義なり。吾人が孔孟二氏に與する所は實に此に在り。(日南集)

### 大正國語讀本卷九終

大正五年九月廿五日印 刷  
 大正五年九月廿八日發 行  
 大正五年十二月廿二日訂正印刷  
 大正五年十二月廿五日訂正發行

大正國語讀本 全拾册	
卷一・二	各金參拾四錢
卷三・四	各金參拾貳錢
自卷五至卷十	各金參拾錢



保科孝一  
 東京市麴町區土手三番町三十六番地  
 合資會社 育英書院  
 東京市牛込區白銀町貳拾番地  
 右代表者 目黑甚七  
 東京市京橋區西紺屋町二十七番地  
 佐久間 衡治  
 印刷會社 英秀舍

發行所 東京市牛込區白銀町二十番地 合資會社 育英書院  
 振替口座(東京)七四二番  
 發賣所 東京市京橋區南傳馬町二丁目 目黑書店  
 振替口座(東京)二八〇九番



